

精神薄弱児の人格性発達に関する研究*

— 信楽寮を中心にして — 第 1 報

正 木 正 高瀬 常 男
安 原 宏 西岡 忠 義

目 次

1. 序論 研究の出発点 (正 木)
2. 課題への接近方法 (高 瀬)
3. 信楽寮における教育的状況 (正木 高瀬)
4. 信楽寮における人間関係の構造と機能 (高瀬 西岡)
5. 寮生の主体的世界の構造 (正木 高瀬 安原)
6. 総括と検討 (高 瀬)

1. 序 論 研究の出発点

1956年8月の初旬のある日、私は黒丸正四郎氏および数名の学生たちと信楽寮^{しがらき}(滋賀県立精神薄弱児施設)を参観した。この参観は私の前々からの懸案であった。かつて私に語られた黒丸氏の次のような言葉が、いつも私の心に流れていたからである。「信楽寮にいて見ると、精薄児の態度、行動のかわり方にびっくりする。彼らは現実に触れた態度を示す。彼らが汽車の土瓶作りの機械にとり組んでいる姿は、真剣で意図的で活気がある。自分たちの作りつつあるものの意味を知り、また、作りつつある自分の存在の意味も分りつつあるようだ。ここに人格性の発達というものが見られる。この施設における生活指導、職業指導には解明さるべき基本的な教育的問題が潜んでいると思われる。……」この言葉は私にとって極めて意味深い示唆に富むものであった。精薄児の教育は近年大いに關心され、その指導に、研究に努力が注がれてきた。しかし、その努力にも拘らず、なお精薄児の全人教育は未だ薄明の中にある状態である。黒丸氏の上述の言葉は、この施設における精薄児の全人教育を示唆するものとして、課題を投げかけるものであった。かくて、私はこの施設における生活指導、職業教育のもつ教育的構造を、実証的に探ってみたい切なる希望をもったのである。そして、もしそれが出来るならば、単に精薄児の教育のみならず、教育構造一般の認識に貢献するであろうと思った。

私たちは二日間、彼らの生活全般における態度、行動を観察した。また他方、寮長池田太郎氏と数時間話し合いながら、この施設における教育方針のみならず、教育的雰囲気を見てとろうと

* これは正木正・黒丸正四郎・高瀬常男・田中昌人・安原宏・西岡忠義・鐘幹八郎の共同研究である。諸般の都合上、正木・高瀬・安原・西岡がそれぞれ筆をとった。文責はもちろん執筆者にある。なお、研究費はIDE近畿支部からの援助による。

努めたのである。かくて、私はこの中から若干の問題を見出した。それは観察内容にせよ、理論づけにせよ、予備的、仮設的ではあるが、これからの探究の糸口になるものであった。この中から一二の問題を当時の私の観察日記から拾って見よう。

子供たちが仕事、とくに機械にとり組んでいる態度に次の諸性質が観察された。(a) 機械に適応し、それと一体になっている。(b) 能動的、自発的意気込みというようなものが感ぜられる。(c) 動作がきびきびしている。しっかりした態度を示している。

これらを見ると、一般の家庭や学校で出来の悪いといわれる子が、ボンヤリとノラクラしている行動と比べると、人間像の違いが感ぜられる。しかしながら、これらの子供たちが、仕事が済んで広場へ出てくると、少し間のびのした、緊張の解けた態度を示すので、そこらなお精薄児的印象をうけた。機械とのとり組みの態度を離れて一般の生活関係に戻るとき、そこに“弱さ”が感じとられるのであった。

かくて、もしこの観察の印象的把握が現実であるとして、そこに次のごとき問いを自分に提出して見たのである。

〔A〕何故に、彼らが機械にとり組んでいるとき、正常とも感ぜられる態度が形成されているであろうか。しかして、この機械と対決して生じている態度は、これらの子供のパーソナリティの形成に、いかなる教育的役割を演じているのであろうか。

〔B〕このような機械との対決という作業形態の他に、ここの子供たちの人格性発達に影響する因子はないものであろうか。

〔C〕さらに、人格性発達にとって有効に作用していると思われる、この寮の全体の教育構造は何であろうか。

Aの問に対しては、精神薄弱児の身体的、精神的機能の特性に対する機械というものの有する機能の性格との相合性が、まず分析され吟味される必要があろう。複雑で微妙で相互作用的である人間関係では、精薄児は多くは不適応におちいり、落伍することをまぬかれない。しかるに劃一的で常同的な機械にとり組んで、そこに親しい友好関係を成立していくのではあるまいか。そこに、子供らにとっては、安定した気持のよい生活の場が形成されていくのではあるまいかと予想されるのである。「汽車土瓶の作業に着手できるようになると、目立ってしっかりした青年らしさを現わしてくるようである」(2, 34頁)。ここに心理学的分析が求められるが、同時に、子供らと機械との間に成立する存在構造の現象学的分析も要求されると思われるのである。

Bの問に対しては、この寮の子供たちが有する生活意識、職場意識という自己意識の内面世界が分析されていかねばならない。彼らが仕事に従事しているのは、遊びでもなく、暇つぶしでもなく、単なる練習作業でもない。彼らの仕事による結果は生産として現実社会につながり、その経済機構の中に組み入れられているのである。そのことの自覚によって、同時に彼らは単に庇護されている存在としてでなく、社会人たる独立可能の存在としての自覚にまで成長するものと思われる。ここにまた、人格性発達の基本的要因があるのではないだろうかと予見されるのである。

次の記録はこの点に関して、極めて示唆的である。「精神薄弱児の生産といえば、われわれは次のような一つの事実を想いおこす。それは生徒達が来寮して間もない八月の夕暮であった。一日の仕事も終えて夕食後の明るいひとときを遊びに憩いに過していた生徒達の眼前を、一台のトラックが施設の製品置場へ向って徐行して来た。間もなくそこにはリング箱に一杯詰められた汽車土瓶（月平均1万5千個から2万個生産され、主として米原駅へ送られている）が山と積まれた。トラックは静かにエンジンの音と共に動きはじめた。その時であった。トラックの周囲にいつとはなしに集まってきていた生徒の中の一人は、両手をあげて“万歳”と叫んだ。又ある一生徒は“僕の汽車土瓶が行く”と独語していた。一瞬見送る全ての生徒の眼に緊張と輝きとが感じられたのであった」（3, 246頁）。かくて、今後の私たちの研究において、これら生徒たちの自覚的な社会意識の発達を、一つの主題として追求することになるであろう。

Cの問に対しては、信楽寮全体の経営ならびに教育指導の構造が分析され、把握されていかねばならない。これは単に経営や指導面の外的枠組をとりあげるだけでは不充分であって、われわれの主題に迫ることはできない。各指導者の内的枠組、寮全体を包む精神的雰囲気をつらえ、それが寮生たちの行動の変化、人格の成長へ関係する仕方を見ていかねばならない。ここには、いろいろのアプローチがあるし、われわれは今後その主なるものの一つ一つを歩いていかねばならないであろう。私個人は池田氏の人生観、教育観、児童観をつらえ、その指導、経営の方法、態度を通して、上述の課題の追求をすすめたいと願っている。実際、私は最初の参観において池田氏と親しく話しあい、幸にもその中から、上述の課題の追求に応ずる重要な洞見を得たのであった。その時、氏は私に“ふれる教育”“しみいる教育”“わびる教育”の三つの教育の姿を説いた。これは教育の実践に長い間真摯にとり組んで来られた現実経験から生れた知見として、私の心を深く打った言葉であった。^{*} たしかに、この三つの教育の形態とそこに流れる原理は、教育の本質に通ずるものであり、教育における基本的人間関係を捉らえたものである。しかし、もしこれがこの寮全体の教育的精神価値構造の基盤となっているとすれば、われわれの主題たる精神薄弱児の人格性発達の要因の中核的なものとして、この三つの教育形態を捉らえていくことができるであろう。このことは研究の端初にあたって、私に希望を与えるものであった。

その他、池田氏との話しあいにおいて、極めて示唆的な言葉を得たのである。一二の例をあげよう。「決して見捨てないこと。職員などに一見して不適当だと思われる人があっても、その人を拒否しないし、捨てない。このことは、また、精神薄弱児の教育指導にもそのままあてはまる。IQ 20 または30といわれる子供も、決して見捨てない。なにか教育可能な点を見、希望をもってゆく。……」この態度は経営面、指導面において寮長より出て、指導員を通し、または全体の精神的雰囲気となって、子供たちの人格性の成長につながっていくものと見てとることができよう。また、児童の捉らえ方について次の言葉がある。「私たち現場のものとしては、過去にその子供がどんなであったかはあまり問わない。現に心と心とが相ふれて交流して相互に働きあいな

^{*} この内容については、本文10頁～12頁を参照されたい。

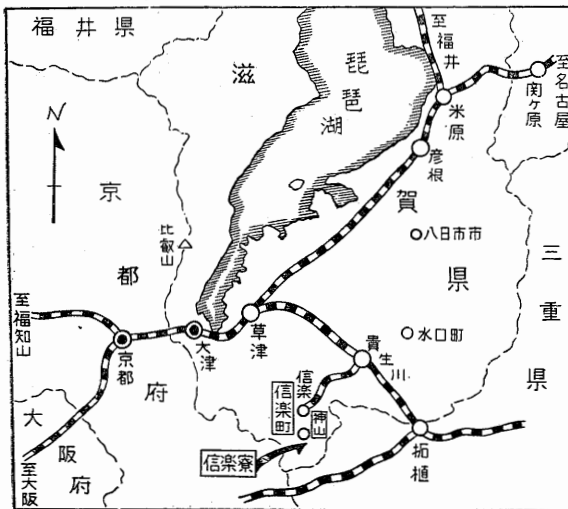
がら、相手をよりよく変えていくことが直接課題である。遺伝がどうの、コンプレックスがどうのというのは、もちろん意味はあるが、そのいかにかわらず、私たちの課題は現在より未来に向って、相手の子供をいかにするかである。……」この言葉は教育の理論面において、実践面において、深い洞察を与えるものである。そして、恐らく、この教育観はこの寮全体の精神価値構造の基盤をなしていくであろうし、子供の成長にかかわること大であると予見されるのである。

かくして、私たちは研究の困難を予期しながらも、なお大いなる希望をもって研究に出発したのである。 < 正木 正 >

2. 課題への接近方法

§ 1 京都から汽車で約一時間半、滋賀県甲賀郡信楽町に着く。信楽町は有名な信楽焼の生産地であり、ことに火鉢の生産量は全国のその80パーセントを占めていると聞く。山間の静かな町で、面積は約1,627平方軒、人口約 17,000人、戸数約3,450戸、そのうち陶器窯元は約100戸、陶器卸業約60戸、その他、陶器製造に関係あるもの約60戸で、従って、全戸数の約16パーセントがなんらかの仕方で陶器関係の職業に従事しておることとなり、年産約5億円(昭和32年度)といわれている。滋賀県立信楽寮はこの町の南方の神山^{こうやま}なるところにあり(図1)、精神薄弱児施設とともに身体障害者更生指導施設をも併設している。*昭和26年8月、さる陶器会社の所有であった建物806坪、土地1,671坪を県が買収し、それに改造増築を加えて、昭和27年4月に開所の運び

図1 信楽町および信楽寮の位置



となったものであって、その後、こんにちにいたるまで、規模も拡大充実されている(図2)。

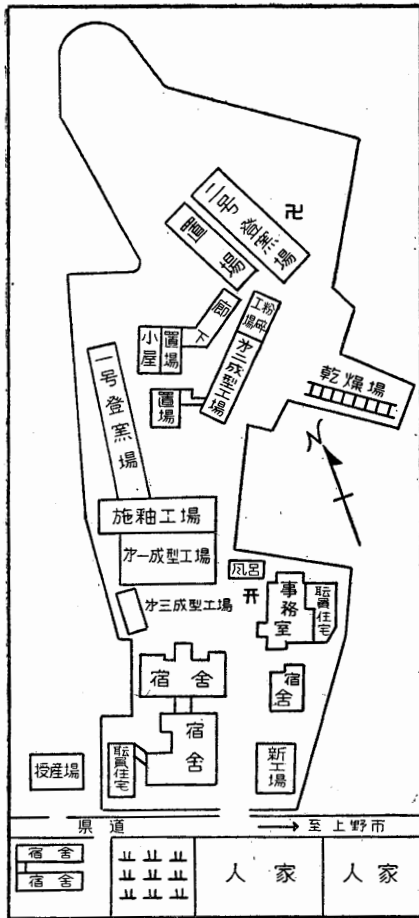
かかる状況のもとにおいて、信楽寮では、満15才から31才までの精薄児約80名** (IQは境界線から20台まで分布) が、知能の正常な身体障害者若干名とともに、寮長以下、指導員2名、保母3名、技能員9名、事務員4名、炊事員2名という職員構成のもとにあって、あるいはこの施設内において、あるいは就職先***において、職業生活を送っているのである。彼らの出身地は、現

* 本文において、寮、信楽寮、もしくは当施設というとき、それは、身体障害者更生指導所をも併わせたものを指している。

** このなかには、身体障害者であるとともに精薄児である二重障害者が含まれている。

*** 町の陶器工場に勤めているものも、この信楽寮から毎日通勤している。勤務時間は、大体、朝8時より夕5時までである。日曜日は休日。なお、就職者(信楽寮からの通勤者)は、現在(昭和33年12月)16名である。

図2 信楽寮略図



在，北は埼玉県から南は鹿児島県にいたるまで、ほぼ全国的に分布しており、しかも、入寮前の生活歴やレディネスいかんにかかわらず、表1のごときフォーマルな日課のもとに、陶器製造を中心とした職業教育が行われているのである。

§2 しかば、数多くの精薄児施設のなかでも、なぜ、われわれはこの信楽寮を調査研究の対象として取りあげたのであろうか。これについての歴史的意義、由来、また、そこから出発する問題性を、序論にて述べてきたのであるが、いまここで改めて考察してみよう。この理由の考察は、われわれの問題意識の所在を確認し、また問題の性格を明確ならしめるに役立つとともに、信楽寮のもつ状況性の輪郭をも同時に明示しようと考えからである。

(1) まず方法的な局面からである。施設というものは、とくに信楽寮のみに限らず、一般的に云って、その構造ならびに機能において、人格のもつ微視的機能を最大限に、また、社会ならびに文化のもつ巨視的機能を最小限に、しかもそれを同時に統合している一つの社会体系であると考えることができる。従って、かかる施設というもの

を調査研究の足場とすることによって、単なる人格内の心理的機制という微視的の局面のみに片寄ることなく、また、人格を越えた単なる社会・文化の動きという巨視的の局面のみに偏向することなく、この二つの局面の交錯し連関している様相を捉えることが可能となる。かかる二重構造的領域こそ、まさに人間の存在性がかかわりをもつ基本的領域であり、この領域においてこそ、人格行為の意味性の追求の第一歩がはじめて可能となると考えるからである(1)。

表1 信楽寮の日課*

6時～7時	7時～7時半	8時～12時	12時～1時	1時～5時	5時～7時	7時～9時	9時半
起朝体洗掃	朝 食後8時まで休	作 10時より10分間休	体 昼 休	作 3時より10分間休	体 掃 夕 入 浴 (火木土)	自 ク 学 治 ラ ブ 活 会 (月) 動 (水) 習 (金)	消 燈
床礼操面除	食	業	操 食 憩	業	操 除 食 木 土		

* 日曜日は7時起床、午前中は1時間半程、便所清掃作業もしくは薪運び、午後は映画観賞に行くことがある。夜は自由時間である。

(2) 以上は施設一般のもつ方法的性格をのべたのであるが、この信楽寮の場合には、つぎのような状況的特殊性を担っているからである。すなわち、さきにもふれたように、この地域社会構造の基本層をなすものは陶器業であり、従って、信楽寮で行なっている陶器製作作業は、他の精薄児施設においてよく見うけられるような、地域社会の産業と異質的な作業ではなく、むしろ、この町の全体的生産経済体制に直結し、しかも積極的にその一翼を担っているのである。このことは表2 がそれを示してくれる。云いかえると、この寮における職業教育は同時に陶器生産作業であり、その点、単なる収容施設や養護施設において行われている教科課程としての工作作業と

表2 生産品目および生産高(昭和32年度)

品 目	生産量(個)	金 額(円)
火 鉢(指)*	8,008	1181,327
汽車土瓶(指)	160,106	923,469
汽車土瓶(信)*	88,282	485,552
花 器(指)	315	20,190
食 器(指)	742	29,431
雑 品(指)	2,535	106,094
煉炭上置(信)	1,515	3,270
こんろ巢(信)	24,130	14,478
上 置(信)	735	5,880
どうなつ(信)	4,208	9,257
煉炭上蓋(信)	3,004	6,008
燃焼器上蓋(信)	6,569	11,824
計	300,149	2796,780

は、その意味を異にしているのである。さらに換言するならば、この寮が基本的に志向している教育目標は、公共社会の職業的状況への積極的な自己適応ということであって**、従って、町の陶器工場という等質的な職業的場への就職という事態が、指導の究極的なねらいと考えられるのである。

(3) かくして、この就職という事態は、子供たちの生活空間にきわだった領域を形成し、彼らの生活意識のなかに未来という心的時間を機能せしめるに与って力がある。髪をのばし、時計を腕にし、自転車にて通勤するといった就職者のみに許された自由度の高い領域が、彼らに対して“期待”の感情と“時間展望”の心的機能を附与するにいたると考えられるからである。そして、かかる心的機能のはたらきが可能であるということが、同時に彼らの人格性発達過程において、その強力な要因となると思われるのである。

(4) さらに、この施設においてとくに注目すべきことは、さきにもふれたように、ここは精薄児のみの施設ではなく、知的機能の正常なる身体障害者、もしくは、知能指数が限界線に位置するものも同時に収容され、しかも、彼らはなんら区別されることなく精薄児と共同生活を営み、協同作業を行っているという現実である。そして、寮の生活において、フォーマルにせよインフォーマルにせよ、地位の高いもの、役割を担っているもの、行動評価の上位のものは、そのような正常な心的機能を有するものたちであって、“誰さんのようになりたい”といったふうに、彼らはまた精薄児たちが描く理想的人間像の基盤ともなっているのである。普通の精薄児施設とは異ったかかる特殊な集団力学的体制が、さらに、寮生たちは青年期という人生の一つの、しかも

* (指)とは身体障害者更生指導所を、(信)とは信楽寮を指す。さきにもふれたように、本文においては、この二つをあわせて信楽寮、寮、当施設と呼んでいる。

** 職業を身につけ、一定の社会的地位を占め、社会的役割を担うことは、人格の社会化過程において、最終的発達位相にあるとも考えることができる。

重大な時期に達しているという事態と絡みあって展開しているのが、この信楽寮なのである。

(5) 以上のべて来た特殊性の諸点は、主として寮生の側の問題であったが、しかし、同時に職員側の問題も勝れてとりあげられなければならない。それは彼らの教育的人間としての成長の問題である。信楽寮はさる陶器会社を買収してできたことはすでに述べたが、しかし、われわれの関心をよびおこすことは、その当時の社員や工員の若干の人たちが、現在では県の職員としてそのまま引き続いて信楽寮に残り、精薄弱児の生活指導、職業教育、教科教育（主として読み書き）に積極的に活躍しているという現実である。つまり、彼ら自身が絶えず教育者として成長の道をあゆみ、現在ではすぐれた教育的人間像をわれわれに示しているということである。このことは、はじめからの教育者とは違って、教育的人間の形成過程を把握するに、豊かな現実と資料と示唆を与えてくれると考えられるのである。序論において、寮長の示せる三つの教育形態を基盤として展開される寮全体の教育的価値構造への問いを、われわれは投げかけた。こうした職員たちが全体的にかもし出す教育的雰囲気において、われわれは特殊な状況性を見出すことができるのである。

(6) さらにまた、この施設の精薄弱児たちの父兄もまた、絶えず成長しつつあるという現実にわれわれは直面したのである。精神薄弱の子をもったということに対して、はじめは希望を失い暗黒の生活を送っていた父兄たちが、こんにちでは期待と希望とをとりもどし、子供たちの将来について、みずから真剣に考え、また年に一度は殆んどの父兄が一堂に会して、互に話しあい、そして、積極的な愛情と自己受容が生れて来たという現実である。現に、寮生 Tak* の両親は、自分の子供がこのように変化し成長してきたのは全く奇蹟的なことであり、また同時に、自分たちも変化の道をたどり、いまではこの子をもったことに対して、かえって感謝するようになったとすら陳述されているのである（5, 6, 7）。この父兄の自己受容の心理は、同時に、子供たちの自己受容の心構えを形成するのに与って力があると考えられるし、また逆に、子供たちの人格性の発達に父兄の人格変化、世界の構造の変容を惹起するものと思われる。信楽寮においては、ことに、父兄の人格構造の追求が比較的確に把握されうる特質をもっているのである。

(7) 最後に、父兄の問題とともに、もう一つ大切なことは、この地域社会の人の寮生に対する受容的態度の問題である。信楽寮の開設当時（昭和27年）の町民は、彼らに対して疑惑と恐怖すら抱き、極めて疎遠な態度をとっていたのであるが、職員の町民に対する積極的な働きかけと、寮生自身の適応的生活態度と彼らの成長の姿から、こんにちでは、非常に積極的に彼らの就職の受け入れ体制をつくるにいたるとともに、町民全体が理解のある好意的態度に変わって来たという現実である。このことは、(2)にあげた特質と相俟って信楽寮の特質をつくっていると見ることができる。

以上のべて来たような、寮生、職員、父兄、地域社会の相互連関的な、しかも発展的な社会関係とそれらがつくり出す教育的雰囲気とが、非常に明確な形態をとって展開しているのがこの信

* 本文 5. 寮生の主体的世界の構造に詳しく述べる（28頁～41頁参照）。

寮寮の特質であって、寮のもつ状況性と問題構造を示唆するとともに、追求についての方法的方向をわれわれに豊かに示指してくれるものと思われる。

§ 3 さて、このフィールドにはいて、われわれが究極的に目標としたいことは、序論にも述べたように、彼ら精薄児の人格性発達の様相を、信楽町という地域社会の全体的結構のなかに位置づけられた信楽寮のもつ教育的状況性の上において分析し、彼らの人格変容の内容、彼らの出合っている世界の構造を、生き生きと具体的に開明するとともに、さらにそれを通して、教育構造一般の認識を深めようとするところにあるのである。従来も、もちろん、精薄児の心理学的認識、その特殊教育などに関して、実験、調査、検査が種々おこなわれてはいる。しかし、それらはいずれも大部分は、資料の皮相的な列挙であったり、単なる集積であったり、統計的処理に終始していたり、あるいは、医学的、生理学的、心理学的事実やメカニズムのみの追求にとどまったりして、職業教育や生活指導が、彼らの人格性発達に対してどのような意味と機能を有しているかを、全体的な教育的状況との構造連関のもとにおいて、しかも、人格の内面的位層において追求した研究は多くはないと思われる。かかる追求こそ、しかし、この特殊教育の現実を開明し、実際に効果を与えるものであって、ここに現象学的方法が要請されてくるのである。人格行為の意味性は、単に心的世界においてのみ問われうるものでもなく、また、客観的社会の世界においてのみ問われうるものでもない。人格、社会、文化の出会いの世界においてはじめて可能であり、しかも、その出会いのあり方それ自身、すでに歴史的意味を担っているのである。われわれの現象学的開明は、この歴史性を担ったかの出会いの世界そのものに焦点づけられなければならないと考えている。もちろん、この方法は現実において、種々の困難性をともなってくるであろう。ややもすると追求者の主観に拘束されて客観性と妥当性を見失い易く、また、主体の心的連関、内的了解連関は把握できても、それをいかに記述するかに当惑し、個は捉ええても全の洞察が疎遠になるといった具合にである。かくして、われわれは、客観性を保持し個と全との連関性を明確ならしめるために、以下にふれるような具体的な手続と接近法を併せもちいたのである。

すなわち、われわれがこの第一報告において申し述べる課題追求の局面として、つぎの三つをとりあげようと思う。(1) 信楽寮における教育的状況の局面、(2) 信楽寮における人間関係の構造と機能の局面、(3) 寮生の主体的世界の構造の局面である。そして、第一の局面においては、序論のCの問い(本文2頁参照)において提出したごとく、寮全体を包む精神的雰囲気の把握が問われ、池田氏との対話、氏の手記などを骨格として、氏の人生観、教育観、児童観の追求がなされる。第二の局面においては、信楽寮が客観的に形成している人間関係の力学的構造、なかなく、友人関係のあり方、および、それらが人格性の発達に対していかに機能しているかが問われる。そしてその追求の仕方として、現在にいたるまで、約3回にわたるソシオメトリック・テストを実施するとともに、具体的行為にあらわれた人間関係、価値関係の現実を把握せんがため

に、研究員2名が彼らの生活場面、作業場面、レクリエーション場面などの各種の具体的場面に参加し、そこで可能な限り継続的に参加観察を行った。さらにまた、観察内容の主観的偏向を避け、できうだけ客観性と妥当性を確保せんがために、行動評価質問紙を作製し、寮生のひとりひとりについて、保母3名、指導員2名、計5名の職員に依頼して、それぞれ評価を行ってもらったのである。第三の局面においては、寮生の人格の内面的世界の構造、つまり、エゴの構造とエゴ・オリエンテーションのあり方が問われる。そのために、寮生のうち（知的機能の正常な身体障害者はのぞく）、生活歴が比較的詳しく分っており、かつ、父兄たちの協力が求められるような、調査ルートの比較的容易なるもの15名を選出し、彼らとの面接を通じてケース・スタディをおこない、彼らの内面的世界に入りこむことによって、人格変容の形相を了解せんとした。同時に、保母、指導員、技能員との面接を通し、また、就職している寮生に関しては、就職先の主人との面接を通して、そのケース・スタディの内容を、あるいは確認し、あるいは修正補足した。さらに強調したいことは、彼らの日誌、なかんずく、彼らが父兄へ書き送った手紙を父兄の好意により回収し、日付けという時間性に準拠して手紙分析を行い、了解をより豊かにし、かつ深めんとしたのである。そして、この手紙分析の方法は、今後のわれわれの研究方法に対して、一つの示唆を与えてくれるものと思われる。以上の第二、第三の局面は、序論において投げかけたAおよびBの問い（本文2頁参照）に対して、開明の道をひらいてくれるものと考えている。以上の三つの局面は、もちろん別個のものではなくして、後にも述べるように、実在するのは信楽寮における全体的なヒューマン・ライフという一つの現実であって、その局面差ではない。従って、それらは、必然的に相互連関的に機能しあっているのである。われわれは、かくして、上述のごとき課題の局面化とアプローチの具体的手続を俟って、しかも、さきに述べた寮の特殊性を意識化し、それに準拠しつつ、この現実の開明へ進まんとしたのである。

＜高瀬 常男＞

3. 信楽寮における教育的状況

§ 1 序論において述べたCの問い（本文2頁参照）、すなわち、精薄児の人格性の発達についての要因、とくに、この施設全体のもつ教育指導の仕方、それを支える精神的雰囲気をはかに把握していくかが、まず問題になる。

今ここでは、指導者の側の内的枠組、すなわち、児童観、教育観、指導的方法、態度、経営の方針、その具体的取扱いなど、すなわち、教育的状況を明らかにすることによって、人格性発達への連関を把握しようとするものである。

そこでまず取りあげられるのは、寮長池田氏の、人間について、指導について、また、経営についての理念と心構えと努力のあり方の究明である。ここで、まず考慮しておかねばならないことは、この池田氏の教育態度、方法がいかなる通路を経て子供たちの精神的成長に影響し、その発達に効果を及ぼしていくかである。それには大体つぎの如き道すじが考えられるであろう。

(1) 池田氏自身が子供たちと面対面 (face to face) に相ふれて、精神的影響を生んでいくことである。

(2) 池田氏の人となりや経営、指導方針が指導員、保母、職員に影響して、それがこれらの人びとの態度、方法となって、子供たちに影響していく道すじがある。

(3) 池田氏を中心とした精神的雰囲気形成され、それが子供たちを包みながら成長への流れをつくっていく道すじがある。これらを勘案しながら池田氏の理念や態度を分析することが大切になる。すなわち、主題たる精薄児の人格性の発達という課題と連関したこの寮の教育的状況を、池田氏のもつ理念、態度、方針から理解し、位置づけることである。

§ 2 すでにふれたように、池田氏は自分の教育の根本問題を“ふれる教育”“しみいる教育”“わびる教育”として、教師(指導者)と生徒(子供)との教育的人間関係の基本構造を捉らえている。

第一のふれる教育とは、ふれるということにおいて人間と人間の直接的な、開かれた共感的関係が成立することである。幼児が母の乳房にふれること、母の手が子供の額にふれること、先生が子供の肩を愛撫すること、おんぶすること、子供たちが握手をかわすこと、すべて、ふれることによって両者の心の安定と心の健康が生れていくのである。「教育の本質が愛であるというならば、教育の初めはまずふれ合いから起ると考えてよいでしょう」(4, 126頁)といい、ふれることを人間関係の基本であるとともに、それをよりよく発展せしめる要諦として把握している。

第二のしみいる教育では、相互の心の底に深くしみ入るものであることを願っている。このことが可能になるには、教師と生徒の間に、もっとも適当な間柄が成立していくことを要する。“間”の問題が生ずる。教師と生徒の間柄が離れすぎているのは“水臭い”間柄であり、両者があまりひつつきすぎているのは“やば臭い”間柄であり、ともによい教育的人間関係になりえないのである。これに対して、氏は教師と生徒の人間関係として、“粹”と“間抜け”の間柄をたてる。前者は「教師と生徒の間柄が水臭くなく、やば臭くもない、どこまでも適当な距離が保たれて、ひつつきも離れすぎもしない姿が、いわば粹な間柄」(4, 127頁)で、後者は緊張のとけた、ホットした、ユーモアのある間柄というのである。そして、粹な間柄ではいつも緊張感を与えるから、どこまでも両者は粹でなければならないが、ときどき間抜けける必要があるというのである。粹の間柄は容易に理解されうるところであるが、間抜けの間柄という表現は、奇抜であるが示唆にとむ提言である。これこそ、現実の人間関係の経験から生れた深い人間知を示すものであるからである。しかして、池田氏も言うように、この間柄は精薄児の教育に当って、大切と思われるのである。

次に、間柄の問題に関連して、叱ること、許すことについて、氏は独自の所見を述べている。叱ること、許すということは一般の教育指導において、とくに、しつけの面の教育方法として、大いに論議されて来ているところである。叱るということを少なくして、賞めることに重点がお

かれているようである。しかるに、池田氏は叱るということを積極的にとりあげ、その教育指導の意味を付与するのである。「叱るべきところがあった場合は正直に叱る」(2, 35頁)と、指導にあたるものに対する寮長の心得の一つとして取り上げている。しかして、叱ることにいろいろの形があるが、教育的には、適当な叱り方の形をとらねばならない。それは愛情に支えられ、相手の心にふれてしみ入るものであることを要する。ここに、粹な叱り方が必要であるし、また時には、間の抜けた叱り方も出て来るのである。ここに、“許す”という態度も生れるのである。このような正しい叱り方、正しい許しを可能にするのは、結局、指導者の人間ということが問題となってくる。池田氏は次の如く云う。「この許しの世界にわれわれが到達するにはどうすればよいか。結局、許す人自身の問題となり、それは自己の誠を責めぬくことよりほかありません。日々自己を責めぬく人であってこそ、許すという境地も自然に起ってくるはずです」(4, 132頁)。

第三のわびる教育では、氏自身、自己反省と批判に徹し、そこに新しい自己決意に達しようとする。氏は30代のときの内心に誇をもった自信満々の世界から、40代における経験を通して、自己をまったく愚かな貧しい教師であるという自覚にいたるのである。「困った子供たちの心理を科学的に研究するのだと云いながら、その私自身が困った蠅であることを知らなかったことは、あまりに非科学的なことでした」(4, 132頁)。

では、この愚かな自分がどうして教育しうるのであろうか。この設問は氏の主体的な教育者としてのギリギリの問いである。「人間が人間を教育するということは、実におそろしいことであり、傲慢なことであると思われる。しかも、それが教育者になった者のどうすることもできない悲しい事実なのです。この悲しい事実を知りながら、なおも子供の教育に当らねばならない教育者とは、なんという業な人間でしょう……」(4, 134頁～135頁)。このような自省と自覚からして、“わびる教育”という意味が生れてくるのである。われわれは教育しながらわびる気持で、愚かな自分を見つめながら、謙虚に努めていかねばならないのである。しかして、氏は教育者のもつこの矛盾的二元性を解決していくものに、己れを超越して神の救い、恵みによるとして、教育への努力と土台をそこに求めている。

§ 3 さて、このような、わびる教育という名の下に示されている徹底した自己省察、批判の態度と決意は、精神薄弱児の人格性の発達にとって、いかなる通路を通して、その要因となっているのであろうか。また、なりうるのであるか。このことは本研究の方法論的考察として、問題をなげかけるものである。ここにあげられている“ふれる教育”“しみいる教育”“わびる教育”のうち、前の二つは、なお教育的に方法化することができる。しかし、第三のわびる教育は、どこまでも教育者自身に向けられた自己課題的のものである。そのことが、どうして生徒の人格性の発達成長に作用していくか。この教育的関係の構造の分析が、教育実践家には不要であっても、研究の方法論としては要求されるのである。これについて、私は試図的に次のように考える。

(1) わびる教育として己れの愚かしさを知り、自己を無にしようとする態度は、己れの威厳を示し、努力を確保し、名を保たんとする気持をなくさせる。従って、それらの意欲より生ずる防衛的態度 (defensiveness) を喪失せしめてゆく。ここに対立、緊張をなくさせる。そして、ゆったりした落着きのある人間関係を生ぜしめる。

(2) この態度では真実 (genuine) で、自己の至らなさ、弱さをそのまま示すことになるから、人間の内部の世界 (internal frame of reference) の交通が開かれることが大になる。

(3) この態度では、相手に対する私心のないかわりが生れ、愛情、温かさ、寛容の人間関係が成立していくことになる。これは、こんにち、来談者中心の相談 (client-centered counseling) の基本的条件とされている無条件の好意的かわり (unconditional positive regard) (12, 96頁) が、このわびる教育という気持の中にもっともよく展開するのである。

これらは言語のレベルで、または行動の形で、寮長と職員の間、寮長と生徒の間に伝えられるとともに、雰囲気の中で、すなわち、両者全体を包む精神的風土の醸成という形で影響していくものである。私は、かつて、かくのごとき相互の影響の仕方を感化として捉らえたのである (8)。

§ 4 かくて、池田氏の上述の如き教育についての基本的態度、考え方が、現実的にどんな形で信楽寮の教育および経営にあらわれているかを考察してみよう。

まず、職員に対する寮長の心得として、次の10をあげている (4, 114頁~123頁)。(1) どんな職員も見捨てない。(2) 職員一人一人を生かすことに努める。(3) 叱るべきところがあれば正直に叱る。(4) 職員の病気、負傷には治りきるまで全員でいたわる。(5) 職員の休養を常に心がける。(6) 職員の自由時間を多くする。(7) 職員会議の数を少なく、充実した内容を。(8) 職員の自発的活動を尊ぶ。(9) 古くして日に日に新たなもの。(10) 寮長はわが家をととのえること。

これらは一つ一つ具体的な問題にふれているから、説明する要はない。ただ、ここに流れるものは職員の尊重であり、私心なき配慮であり、相手の成長の念願である。また、精薄児教育にたずさわる人びとへの温かい心づかいである。現実の経営の問題として、これらの心得をそのまま遂行することには困難が伴うことであろう。にもかかわらず、このような心得を池田氏が自己自らに課するには、容易ならぬ決意がかくされているのである。“どんな職員も見捨てない”ということは、すでに序論でも一寸触れたが、ここで次の如き言葉が述べられている。「私としては、他の場所はいざ知らず、いやしくも精薄児をこの世に更生させようとする場所では、たとえ好ましくない職員が現われたとしても、決して見捨てるような寮長であってはならないと思います。むしろ、その人が喜んでそこにいつき、その人なりにより指導者となる努力をしてゆく姿にまで、導いてやる忍耐こそ必要です。そのときこそ、精薄児教育は真に光を放つとおもいます。……」(4, 114 頁)。これはなかなか容易ならぬ決意であり、信念だと思われる。“寮長はわが家をととのえること”という心得は、自己自身、自己の家庭への反省、批判を求め、これを律し

ていくことを念ずる主体的念願であって、これは前述のわびる教育の態度からもまた当然出てくるものであろう。

さて、このような寮長の職員に対する心得は、精薄児への影響としては間接的であるとも云われよう。この心得を通して形成されるであろう職員の態度、心情、そこにつくり出す雰囲気は、精薄児の人格性形成に現実的意味を有するものと考えられる。〈正 木 正〉

§ 5 序論においてもふれたように、信楽寮は精薄児の全人教育を教育理念としてもつものであるが、しかし、上記の教育的状況、精神的雰囲気を基調としながら、現実的に設定される教育目標の様相は、この施設の全体的な社会体制の変化とともに、歴史的に変動し進展しているとみることができる。かかる変動の基本的様相を、施設の開設以来こんにちに至るまでの歴史の流れにそってみると、これを三つの時期に分けて把握することができる。

第一の時期は、いわば身の整備の時期とも名づけられうるものである。昭和27年の創設当時から、大体、昭和29年にいたるまでが、この時期に当たると考えられる。この時期においては、何はともあれ、陶器をつくるという施設内の作業それ自体に向って、寮生の生活と行為とは水路づけられ、しかも、彼らがこの地域社会からマイナスの評価と待遇とを受けないように、その生活が統制され、従って、日常身の振舞いや行為のあり方に対してガイダンスが焦点づけられた時期である。それ故に、陶器の生産量を高めるとか、地域社会に融合するとか、就職させるとかいったことは、未だ直接の、しかも積極的な教育目標とはなっていなかったのである。さらにまた、職員の側においても、教育、なかんずく精薄児教育に関しては未経験のものが多く、教育価値の設定の仕方、教育方法、指導方法、経営方法についても、職員自身が混沌の状況にあった。云いかえると施設の体制の確立に、大部分の力が集中されたとみることができる。

第二の時期は、大体、昭和30年から32年にいたるまでの、いわば職業教育中心の時期である。この時期においては、施設側の体制が確立してくるとともに、陶器の生産量もおのずから上昇し、しかも、地域社会との積極的な連帯関係が形成され、施設は地域社会において指導的な役割を獲得するとともに、また地域社会の側においても、寮生の技能や行為を高く評価し、それを受容し、やがて就職の受け入れという形態が生じてきたのである。従って、この時期においては、寮生の就職ということが施設側のリアルな積極的な教育目標として浮びあがって来ることとなり、等質的な職業的場（町の陶器工場）への就職ということが、指導の最終段階として、それに教育目標が焦点化されて来たものとみることができる。

第三の時期は、大体、本年（昭和33年）に入ってからのものであつて、いわば人格教育的な時期といふことができる。精薄児が文化的な価値状況に適応し、みずから社会価値、精神価値を担い、それを内面化し、また創造していくためには、ただ与えられた単一の作業の処理能力を獲得するだけでは未だ不十分であつて、みずから世間知を深め、人間知を豊かにしていかなければならない。云いかえると、文化的価値体系を主体的に習得し、それを深め、また、それに対決してい

く能力も備わらなければならない。すなわち、精薄児だからといって教育を控え目にすることは許されない。このように、自分で自己を問い、みずから社会人として生活することのできる人格が、なんらかの仕方では形成されなければならない。かかる価値目標が、リアルな水準において問題にされるべき時が満ちて来たのである。そして、この価値実現のための第一歩として、読み書きという教科教育が行われ出した。これは彼らに単に文字を覚えこませるとか、文盲の劣等感から彼らを解放してやるというのではなくして、文字という文化形象、また、それによるコミュニケーションを通して、公共社会の一員となるという人格形成が、ここで意図されていることは言うまでもない。現在は、この全人的な人格形成という点に努力が注がれているとみることができる。

以上のべてきた教育目標の変動の様相のなかに、われわれは信楽寮の担っている歴史性を観てとることができるとともに、教育的な時熟性(10, 402頁～404頁)の内在的作用を見出すことが可能である。 <高瀬常男>

4. 信楽寮における人間関係の構造と機能

§ 1 信楽寮の精神的雰囲気は寮の全体的な人間関係の流れのうちに醸し出され、それが同時に、子供たちの人格性の発達に対して、また、職員たちの人間的成長に対して、相互に強く影響しあっていることはすでに述べた。そこで、ここでは、人間関係、なかんずく、私的な自発的な友人関係の局面をクローズ・アップして、友人関係のあり方、構造と、それが人格性の発達に対してはたらく機能を中心的に究明していく。かかる追求は序論における問いB(本文2頁参照)に示唆を与えてくれるであろう。 <高瀬常男>

§ 2 信楽寮における友人関係の一般的構造 (1) 友人関係形成の要因 寮における子供たちの生活を観察していると、ある子供は友人関係の接触範囲が広く、行動像は活動的であり、表情は生き生きとして豊かであるが、また、ある子供は行動空間が狭く、動きは不活発で表情はうつろであって、友だちもなくひとりぼっちである。このように、子供たちはそれぞれ独自の友人関係のあり方、世界内容を担っている。このように、子供たちを接近-離反させる(もしくは相手を受容-拒否せしめる)要因はなにか。いいかえると、友人関係成立のモチーフ(ことに自己意識的な理由)が問われてくる。われわれは寮生全員にソシオメトリック・テスト(面接法による)を施行し、それを明らかにせんとした。表3 および表4はその結果を示したものである。

表3から分るように、友達を選択の理由として“なにになしてくれるから”が非常に多い。こういった理由は、総じて自己志向的要求の表現であり、しかも、受動的的特色をもっている。つぎに、“同じ職場だから”“同じ部屋だから”というのは、エコロジカルな要因がはたらくことを示している。もちろん、その百分率は小さいが、選択理由として他の理由を述べている場

表3 好きな友達として選択した理由

理 由	頻 数	パーセント
1. なになにしてくれるから	93	44.0
親切にしてくれる(親切だ)	31	
よく遊んでくれる(遊ぶ)	19	
よく世話をしてくれる	10	
仕事を教えてくれる	9	
手伝いしてくれる	8	
本をみせてくれる	6	
食べ物をくれる	6	
その他	4	
2. エコロジカルな理由	30	16.4
同じ部屋だから	11	
同じ職場だから	10	
その他(家が近いなど)	9	
3. 性格特性	40	18.9
おとなしい やさしい	20	
おもしろい 話しやすい	12	
その他	18	
4. 仕事の技術がすぐれている	16	7.5
5. 理由不明	31	15.0
計	211	100.0

表4 嫌いな友達として拒否した理由

理 由	頻 数	パーセント
1. 暴力をふるったり乱暴をする	75	39.0
すぐ暴力をふるう(なぐるける)	36	
よくけんかをする	10	
すぐおこる	16	
その他	13	
2. うるさい 悪口をいう	50	25.9
うるさい 執拗でやかましい	23	
いやなことをいう	9	
文句ばかりいう	6	
あだ名 悪口をいう	12	12.0
3. 盗みをする	23	
他人の持ち物を盗む	16	
他人の部屋やコウリを荒す	7	4.1
4. 食事の食べ方がいやだ	8	
5. ウソをいう	7	3.6
6. その他	19	9.8
7. 理由不明	11	5.6
計	193	100.0

合でも、両者が同室ないしは同職場であることが多い。たとえば、“好きな友達”“同室したい友達”“一緒に働きたい友達”という基準を設けたソシオメトリック・テストを施行した場合、同室のもの(あるいは同職場のもの)から選ばれた率の方が、異室のもの(あるいは異職場のもの)から選ばれる率よりも多いのに対して、拒否の場合は、同室のもの(同職場のもの)から受けた率と異室のもの(異職場のもの)から受けた率との間に、ほとんど差がみられないのである(11, 218頁)。

このように、信楽寮においては、友人関係の形成がエコロジカルな要因によって規定される傾向がある。そして、人格特性がモチーフになる場合であっても、内面的な特性の理解にもとづくというよりも、むしろ、“おとなしい”“おもしろい”といった表面にあらわれた行動型の位相に限定されているように思われるのである。

表4に示したように、嫌いな友達の選択理由は、“暴力をふるう(なぐる、ける)”“よく喧嘩をする”“口やかましい”“執拗である”“他人の物を盗む”の5項目に殆んど分類できるが、選択の理由にくらべて、拒否の理由は一般に共通しており、しかも比較的明瞭に意識化されていると云うことができる。

(2) 人間関係における相互結合の程度 われわれは、約二カ月半の間隔をおいてソシオメトリッ

ク・テストを3回実施し、かつ、それと並行して行動観察を行い、友人関係の変動過程を追跡してきた。その結果、信楽寮における寮生の友人関係は混沌としており、集団全体が未分化で明確な下位集団の分化が認められず、しかも、友人関係が一般に浮動的であることが明らかになった。しかし、ソシオメトリカルな地位に関しては、かなりの恒常性がみられたのである。

そこで、われわれは、友人関係の一般的構造を示す一つの指標として、相互結合の程度を検討した。テストに当って3名を選択させたのであるが、しかし、選択の順位に重みづけを加えなかったで、友人関係の型式として、“相互選択” “一方選択” “相互無視” “一方拒否” “相互拒否”の五つが考えられる。そこで、いま相互結合のあり方を検討するにあたって、便宜上、“相互選択” “一方選択” “相互無視”の3型式について考察することにする。

一定の大きさの集団においては、相互結合の数が多いほど、人間関係におけるテレの強度は一般に強いと考えられる。そこで、この相互結合の程度を検討する場合、われわれは、その理論値を基準として実測値と比較した。表5はその結果を示したものである。この表によると、寮生の

表5 友人関係における相互選択・一方選択・相互無視

人間関係の型式	理論値の式*	理論値	実測値	差(実-理)	χ^2
相互無視	$\frac{N(N-1)}{2} \cdot \frac{(N-1-d)}{N-1}$	2078.58	2114	+35.42	0.416
一方選択	$\frac{N(N-1)}{2} \cdot \left(\frac{d}{N-1}\right) \left(\frac{N-1-d}{N-1}\right) \times 2$	193.76	156	-37.76	7.713
相互選択	$\frac{N(N-1)}{2} \cdot \left(\frac{d}{N-1}\right)^2$	4.66	7	+2.34	1.173
計	$\frac{N(N-1)}{2}$	2277	2277	0	9.302

$N=71$ (第1回テスト実施時の寮生数) $d=3$ (許容選択数)

友人関係における相互結合の理論値と実測値の間に、統計的には有意差がある($p<0.001$)。しかしながら、これは相互選択の数が多いことを意味しているのではなくして、一方選択の実測値が理論値よりも少なく、従って、相互無視の実測値が多いことを意味しているにほかならない。相互無視が多いのは、知的能力がきわめて低いためにテスト不可能なものの、あるいは、他の寮生から多くの選択を受けているにも拘らず、“寮内には友達になりたい者がいない”と答えた者たち(一部のリーダー)に、ある程度帰因している。** かくのごとく、信楽寮では、相互選択の実測

* $\frac{N(N-1)}{2} = nC_2$, 無関係の確率は $\frac{N-1-d}{N-1}$, 故に相互無視の確率はその自乗である。選択の確率は $\frac{d}{N-1}$ であり、従って、AがN人中よりBを選択し、BがAを無視する確率は $\frac{d}{N-1} \cdot \frac{N-1-d}{N-1}$ であり、その逆も可能であるから2倍する。従って、相互選択の場合は $\frac{d}{N-1}$ の自乗となる。

** かかる現象のもつ意味は、西岡が別の機会に調査した中学生のあるクラスの集団と比較すると、一層明らかであろう。すなわち、中学生の場合は、一方選択は、理論値よりも実測値の方が少ないのに対して、相互選択の実測値はその理論値の約10倍であった。

値はその理論値と大差がなく、したがって、このことから逆に、友人関係の結合の度合いが弱いと推定できるであろう。

(3) 他者のソシオメトリカルな態度の認識のあり方 参加観察や寮生との面接の結果、彼らは他者（職員および同僚）の感情や意図を正確に察知したり、了解したりする能力が著しく劣っていることも明らかになった。また就職経験者（就職はしたがうまくいかずに、一時寮に戻って寮で仕事をしている者）との面接結果からも、就職先における職場不適応の原因は、主として人間関係における葛藤にあることが推察されるのである。つまり、彼ら精薄児の欠陥の一つとして、自己と環境との関係把握という知的能力が低いと考えることができる。そこで、われわれは、友人関係場面における他者の認識という局面をソシオメトリーに導入し、他者に対する自己のソシオメトリカルな態度、および、自己に対して他者がもっているであろうと自己が推定する他者のソシオメトリカルな態度、の2方向的な対人感情関係を測定し、それが彼らの友人関係場面において、いかなる特質をもっているかを検討しようとしたのである。

従来のソシオメトリーが一般的にとっている基本的構想は、人間相互の対人感情を基礎にして“牽引”“反撥”“無関心”の3型式を設定することにあった。かかるソシオメトリーからは、“自己に対する他者のソシオメトリカルな態度”“他者に対する自己のソシオメトリカルな態度”の2種類の資料を得ることができる。しかしながら、ソシオメトリカルな意味における行動は、客観的刺戟場とそこにおける反応からのみ成り立つものではない。おのおのの人格が主観的に思惟している自己意識の層における人間関係の認識内容を明らかにすることによって、人間関係場面における行為の意味の理解がはじめて可能となるのである。そのために、“各人格が他者に対してもつ反応態度”と“各人格がもっている自己に対する他者の反応の期待”の2局面の把握が必要になってくる。

われわれの場合、具体的には次のような手続によって資料を集めた。(1)特定の場面において、特定の相互交渉を行なう積極的、あるいは、消極的な意志の有無の報告（たとえば、誰かとの同室の希望や拒否など）。(2)他者が自己に対して抱いているであろうと期待される特定の場面において、特定の相互交渉を行なう積極的、あるいは消極的な意志の有無の報告（たとえば、彼は私と同室を希望したいと思っている、もしくは、思っていないなど）。これらの報告は、一群の人びとに対して総括的に行わせるのではなくして、各人に対して別々に行わせる。従って、全寮生の間にみられる相互関係は、2人ずつを組合わせた多数の対にわかれ、各対の間に成立する好悪や無関心の態度と、その推定との関係がとり出される。^{*} われわれは、かかる対人的態度の認知の正確さを検討するにあたって、その判定基準として数学的モデルを設定し、理論値と実測値との比較を通して、その特質を把握せんとした。表6には、各寮生に“一緒に遊びたい友達”を1名選択させ、同時に、“自分と一緒に遊びたいと思っているであろうと自分が思っている友達”を1名推定さ

^{*} N 人のメンバーの中から2人ずつを対にする組合せは $nC_2 = \frac{N(N-1)}{2}$ である。

せた際の各結合型式の理論値と実測値の関係が示されている。また、表7 には、ソシオメトリーの特定の基準における実測値と理論値との関係が示されている。

表6 各結合型式の理論値と実測値：遊びの場面

結合型式	理論値の式	理論値	実測値	差 (実測値- 理論値)	χ^2
1 () ()	$\frac{N(N-1)}{2} \cdot \left(\frac{N-1-d}{N-1}\right)^4$	2334.8	2377	+42.2	0.763
2 $\longrightarrow$	$\frac{N(N-1)}{2} \cdot \left(\frac{N-1-d}{N-1}\right)^3 \left(\frac{d}{N-1}\right) \times 2$	67.4	55	-12.4	2.871
3 $\longleftarrow$	同上	67.4	42	-25.4	9.572
4 $\longrightarrow$ $\longleftarrow$	$\frac{N(N-1)}{2} \cdot \left(\frac{N-1-d}{N-1}\right)^2 \left(\frac{d}{N-1}\right)^2 \times 2$	5.11	8	+2.89	1.634
5 $\longrightarrow$ $\longrightarrow$	同上	5.11	0	-5.11	5.110
6 $\longrightarrow$ $\longleftarrow$	$\frac{N(N-1)}{2} \cdot \left(\frac{N-1-d}{N-1}\right)^2 \cdot \left(\frac{d}{N-1}\right)^2$	2.55	2	-0.55	0.118
7 $\longrightarrow$ $\longrightarrow$	同上	2.55	0	-2.55	2.550
8 $\longrightarrow$ $\longrightarrow$ $\longleftarrow$	$\frac{N(N-1)}{2} \cdot \left(\frac{N-1-d}{N-1}\right) \cdot \left(\frac{d}{N-1}\right)^3$	$\doteq 0$	1	0	1.000
9 $\longrightarrow$ $\longrightarrow$ $\longrightarrow$	同上	$\doteq 0$	0	0	0
10 $\longrightarrow$ $\longrightarrow$ $\longrightarrow$ $\longleftarrow$	$\frac{N(N-1)}{2} \left(\frac{d}{N-1}\right)^4$	$\doteq 0$	0	0	0
計	$\frac{N(N-1)}{2}$	2485	2485	$\doteq 0$	23.618

$N=71$ (寮生の数) $d=1$ (許容選択数) $p<0.001$

いま、2人の寮生 Si と Sj によって形成される可能な結合型式は、次の4種類である。(1) Si が Sj を選択する [$Ci : Si \rightarrow Sj$]、(2) Si が Sj を推定する [$Gi : Si \longleftarrow Sj$]、(3) Sj が Si を選択する [$Cj : Sj \rightarrow Si$]、(4) Sj が Si を推定する [$Gj : Sj \longleftarrow Si$]。これらの結合矢は、それぞれ牽引 (+)、反撥 (-)、無関心 (0) の態度、または推定を意味する。そこで、いま、選択と推定の (+) の局面だけを考えるならば、結合矢の数は0～4の5種類が考えられる。表8はそれを示したものである。

選択および推定を、寮生一人ひとり同数だけ行なうように制限された場合の結合型式の理論値 (PE) を予測するための公式は、 $PE = \frac{N(N-1)}{2} [P(Ci) \cdot P(Gi) \cdot P(Cj) \cdot P(Gj)]$ である。 $P(Ci)$ は Si が Sj を選択する確率 $\left(\frac{d}{N-1}\right)$ 、あるいは、無視する確率 $\left(\frac{N-1-d}{N-1}\right)$ 。 d は許容選択数。 $P(Gi)$ は Si が Sj を推定する確率 $\left(\frac{d}{N-1}\right)$ 、あるいは、無視する確率 $\left(\frac{N-1-d}{N-1}\right)$ である。 $P(Cj)$ 、 $P(Gj)$ の場合も同様である。

すでに述べたように、結合型式における結合矢の数は0～4の5種類であるから、各個人の選択と推定

の数を d に制限するならば、 $[P(Ci) \cdot P(Gi) \cdot P(Cj) \cdot P(Gj)]$ は 5 個の異った値に変化するのみである。

何故ならば、各要素は、選択あるいは推定の場合は $\frac{1}{N-1}$ 、無視の場合は $\frac{N-1-d}{N-1}$ となり、しかも、そのいずれか一方の値をとるのみだからである。従って、 Si と Sj の間に選択あるいは推定の結合矢が 4 個ある場合、表 8 の第 10 結合型式となり、その値は $\left(\frac{d}{N-1}\right)^4$ である。また、相互無視の場合は $\left(\frac{N-1-d}{N-1}\right)^4$ となる。

表 7 各“基準”の理論値と実測値

結合型式	基準 一緒に遊び たい		同室になり たい		一緒に就職 したい		理論値
	(+)	(-)	(+)	(-)	(+)	(-)	
1 () ()	2377	2381	2382	2378	2390	2381	2334.8
2 $\longrightarrow$	55	45	46	50	42	45	67.4
3 $\longrightarrow$	42	48	43	46	37	46	67.4
4 $\longrightarrow$	8	10	11	11	10	11	5.11
5 $\longrightarrow$	0	0	0	0	3	1	5.11
6 $\longleftrightarrow$	2	0	1	0	1	1	2.55
7 $\longrightarrow$	0	0	1	0	1	0	2.55
8 $\longrightarrow$	1	0	0	0	1	0	0
9 $\longrightarrow$	0	0	0	0	0	0	0
10 $\longrightarrow$	0	1	1	0	0	0	0
計	2485	2485	2435	2485	2485	2485	2485

って、対人的態度の認知が不正確であることを意味している。しかも、複合的相互関係の実測値と理論値との間に差がないという現象は、友人関係のあり方が発達のみにて低次のものであり、かつ、その結合は弱いことを示しているといえるであろう。

§ 3 信楽寮における友人関係の一般的範囲 (1) ソシオメトリック・タイプを中心として 以上述べて来た信楽寮における友人関係の特質は、各寮生に対してどのように機能し、また、彼らに対してどのようなタイプの地位と役割を与え、それによって、彼らはいかなる人格性発達の道を歩むかが、ここで問われる。

われわれは、つぎの五つのソシオメトリック・タイプを設定した。CH 型 (Choice-High 型であって、多くの選択を受けた者)、CRH 型 (Choice-Rejection-High 型であり、選択も拒否もともに多く受けた者)、CRL 型 (Choice-Rejection-Low 型であり、選択も拒否もともに受けなかった者)、RH 型

さて、表 6 から明らかなように、各結合型式にみられる実測値と理論値との間には、統計的に有意差 ($p < 0.001$) があった。各結合型式の実測値は主として第 4 型式までであり、第 5 型式から第 10 型式までは殆んど見られない。この傾向は表 7 の他の特殊な場面においても、共通にみられる。しかれば、このような、結合型式のあらわれ方は、いかなる心理学的意味をもつのであろうか。すなわち、かかる現象は、友人関係が全く一方的結合の段階にあり、複合的相互結合が殆んど存在しないことを示している。さらにまた、ソシオメトリカルな態度と、その推定の間に、“ずれ”があること、従

表8 ソシオメトリカルな態度
とそれの推定にみられる
結合型式

Si		Sj		結合型式
Ci	Gi	Cj	Gj	
0	0	0	0	1 () ()
+	0	0	0	2 →
0	0	+	0	
0	+	0	0	3 >
0	0	0	+	
+	+	0	0	4 →
0	0	+	+	
+	0	0	+	5 →
0	+	+	0	
+	0	+	0	6 →
0	+	0	+	7 >
+	+	+	0	8 →
+	0	+	+	
+	+	0	+	9 →
0	+	+	+	
+	+	+	+	10 →

(Rejection-High 型であって、多くの拒否を受けた者)、非定型(以上の4範型に分類できない型)である。かかるタイプの各々を行動観察の結果とあわせて検討するとき、行動特性に関して、各タイプの間に着しい差異を認めることができた。そこで、客観性を確保するため、われわれは行動評定尺度を作成し、指導員2名、保母3名に依頼して、寮生一人ひとりについて行動評価をしてもらった。表9は各タイプと行動評価との関係を示したものである。

表9からも明らかなように、各タイプ間に行動評定値の顕著な差がみられる。そして、各評定項目ごとの評定値の各タイプ間の差は、いずれも統計的に有意であった。(Hテスト, $p < 0.05 \sim 0.01$)。以下において、各タイプと行動評定値との関係を、“人間関係の局面”“仕事の局面”“個人的特徴の局面”について検討していこう。

人間関係の局面について この局面に関する行動評定の項

表9 ソシオメトリック・タイプとその行動評定値 (1957和10月現在)

タイプ		C H 型		C R H 型		C R L 型		R H 型		行動評定値は5人の評定者の評定値の合計で示した。評定尺度は5段階であるから、各人が1人の評定者から得る最高値は5、最低値は1である。従って25が最高値で5が最低値となる。	
N	(人)	7		3		10		10			
I Q	(平均)	67		46		43		46			
年齢	(平均)	19		18		21		21			
評定項目		M	S D	M	S D	M	S D	M	S D	Hテスト	p
人間関係の局面	ひとと親しむ	18.6	1.72	14.3	2.75	12.8	3.09	10.7	3.46	H=12.4	p<0.01
	ひとの立場を受け入れる	19.4	1.61	14.3	2.12	13.3	3.17	10.5	2.40	H=16.2	p<0.01
	ひとと協力する	19.3	1.94	15.7	1.22	12.3	2.05	11.6	2.05	H=11.7	p<0.01
	仲間意識がある	21.0	1.81	16.0	1.41	10.9	1.04	10.9	1.92	H= 8.6	p<0.05
	指導力がある	20.4	1.94	14.0	3.00	9.1	3.32	9.1	2.79	H= 7.6	p<0.05
仕事の局面	仕事を熱心にする	22.4	2.89	15.0	2.44	14.0	6.85	15.0	4.69	H= 9.9	p<0.05
	持久力がある	22.0	2.42	14.6	3.21	13.4	6.45	14.4	4.05	H= 9.4	p<0.05
	仕事の能率がいい	22.0	3.03	16.0	3.34	12.1	5.38	11.5	3.12	H=14.6	p<0.01
個人的特徴の局面	態度が明るい	19.0	1.95	16.0	2.43	16.9	3.87	13.8	3.32	H=13.1	p<0.01
	規則を守る	18.6	2.02	14.7	2.21	13.0	3.14	12.2	3.32	H=11.2	p<0.01
	身の整理ができる	19.2	1.30	15.7	2.31	11.5	5.19	11.3	3.09	H= 8.6	p<0.05
	自制心がある	20.0	2.09	14.3	2.73	13.9	4.69	10.3	3.23	H=16.1	p<0.01
	判断力がある	18.7	3.13	13.3	2.02	10.7	4.12	10.8	2.46	H= 7.9	p<0.05

目は表9に示したごときものである。^{*} 表9 からわかるように、人間関係の局面における各タイプの評定値は、CH 型が最高で、RH 型と CRL 型が最低である。さらに、CH 型と RH 型との中間タイプであるCRH 型が、評定値においても、CH 型とRH 型のほぼ中間の値を示している。このことは、次のような心理学的意味をもつと考えることができる。すなわち、信楽寮という集団状況においては、CH 型のものたちは、人間関係の局面において優れた行動能力をもっており、従って、フォーマル・インフォーマルな社会的地位も高く、役割行為も活潑に行われることになる。すなわち、社会的サンクションの機制が、すぐれて作用してくる。そして、このことは、彼らの自我意識の深まりと、自己受容とを醸成するに与って力があり、ここに好ましい人格特性の陶冶が行われることになる。それに対して、RH 型のものたちは、他の寮生から多くの拒否を受けている“のけもの”であり、他者との受容関係から疎外されているために、フォーマル・インフォーマルな地位や役割も得られず、従って、行動空間の拡大と深まりにも制限が生じてくる。そして、この行為の限定は彼の行為能力の充分なる発展を阻害し、従って、ことにこの局面における人格性の発達には、著しく遅滞する結果となるのである。

仕事の局面について 表9に示されているように、“熱心さ” “持久力” の項目に関しては、評定値は CH 型が最も高く、他の3タイプは同様に劣っている。しかし、“能率” の項目の評定値は、人間関係の局面の場合と同様に、CH 型が最高、RH 型と CRL 型とが最低、CRH 型（中間型）が中間の値を示している。すでに述べたように、当施設においては、就職と直結した職業教育が行われている。従って、仕事の能力や技術が向上してきたということは、近い将来において就職できるということを、当人の自我意識の面においても、また、他者（職員および寮生）の承認の面においても確認されることを意味している。従って、当人にとっては、就職という時間展望が現実的水準において作用する結果、満足感と心理的余裕をもつようになり、人間関係においても、好ましい態度を形成していくと考えることができる。

個人的特徴の局面について 表9に示されているように、“態度が明るい” という項目の評定値は、CH 型が最も高く RH 型が劣っており、CRH 型と CRL 型が両者の中間の値を示している。ところで、CRH 型と CRL 型とが同じ評定値を示しているのは、両者とも一見したところ同じような明るい行動像を評定者に与える結果であろう。（前者は活潑な明るさであるに対して、後者は精薄児特有の“意味もなくニコニコしている”無力な明るさなのであるが）。また、“身の周りの整理ができる” “判断力がある” という項目に関しても、評定値は CH 型が最高、CRH 型が中間、RH 型と CRL 型が劣位の値を示している。このことは、さきにもふれたように、あるいは就職に対する現実的な時間展望の結果、あるいはまたリーダーとしてのサンクションの結果、かかる自我意識が芽生え発達してきたものと解することができる。

(2) ソシオメトリック・タイプの示す行動像を中心として 以上、寮生のフォーマル・インフォーマ

^{*} 紙幅の都合上、各項目ごとについての詳述は省略する。

ルなソシオメトリック・タイプの一般的把握を行ってきたのであるが、ここでは、われわれの行った行動観察、寮生との面接、職員（ことに指導員および保母）が描いている寮生の人格像についての報告を総合することによって、各々のソシオメトリック・タイプが示す具体的行動像について申し述べよう*。

CH 型はフォーマル・インフォーマルな関係におけるリーダー群であるが、行動観察その他の結果、そのリーダーシップに二つの形態があることがわかった。その一つの形態は、作業の能力、技量は寮生の中では群を抜き、知的能力も腕力もすぐれており、活潑で生き生きとした、しかも、安定した全寮的なリーダーの形態である。たとえば、表10の寮生 *Kej* をその例としてあげることができる。彼は当施設内外の活動（たとえば、町の野球チームへの参加や就職先での作業）を通じて、地域社会の人びとと接触する機会が多くなった。こうした経験を通して、彼は自己の能力が一般人にくらべて劣っていないことを自覚することによって自信を得、積極的にリーダーシップを発揮するようになった。とくに、就職先よりもらう月給（出来高払いで7,000円～8,000円）で寮費を自分で払えるようになったことにより劣等感がなくなり、態度や行動がしっかりしてきた。そして、ますます技能が向上し、それが寮生たちから承認されることによって、スター型のリーダーとなったのである。図3は *Kej* の行動評価プロフィールである。

もう一つの形態は、奉仕型のリーダーの形態である。たとえば、表11の寮生 *Kar* をその代表としてあげることができる。彼は入寮当時は微々たる存在であったが、持前の世話好きな性質が買われて、入浴の順序を告げるアナウンサーや部屋長のごときフォーマルな役割を与えられた。これによって他の者は彼の云う通りに行動するので、彼はひとを使うことに自信をもち、高圧的な言動を用いてひとを左右するリーダーの地位を次第に獲得してきた。しかし、一旦その地位につくや、地位の低く無力である者に対しては親切によく世話をすることによって、その地位を維持している奉仕型のリーダーとなったのである。図4は *Kar* の行動評価プロフィールを示したものである。

CRL 型は信楽寮における集団力学的体制の周辺部を形成する浮動型であり、これには二つの形態が含まれている。その一つは、行動空間が狭く活動力を欠き、作業能力は劣り、余暇はただ漫然と過し、楽しみといえば飲食のことだけで、とくに、食事についての欲求のみが旺盛であるといった貧弱な人格特性を担っているものである。従って、友人関係において、他者の要求を満たしえず、選択されるに十分な誘意性をもっていない。かかるタイプのものが CRL 型の大部分を占めている**。もう一つは、仕事の能力はすぐれており、人格特性においても、とくに劣っているわけではないが、ある悪癖（たとえば、盗みなど）をもっているために、他者との心理的受容関係から疎外されているものである。たとえば、表10の *Tke* はその一つの例である。かかるタ

* CRH 型のものは人数もすくなく、行動像についても顕著な特性がみられなかったのでここでは省略する。

** たとえば、寮生 *Goh*, *Nob* などはその例であるが、われわれがとりあげた15名の事例（表10および表11）には入っておらず、全体的連関を欠くのでプロフィールは省略する。

図3 *Kej* の行動評価プロフィール *

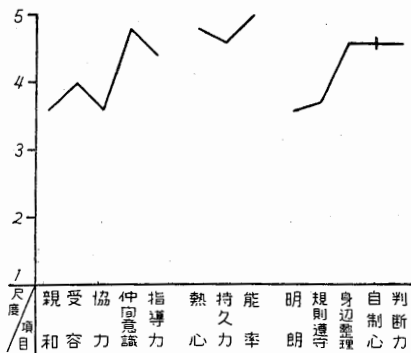


図4 *Kar* の行動評価プロフィール

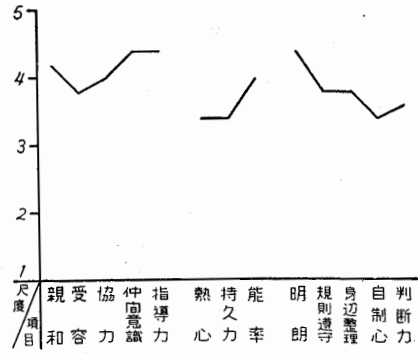


図5 *Tke* の行動評価プロフィール

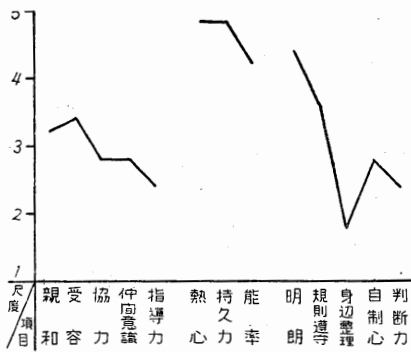
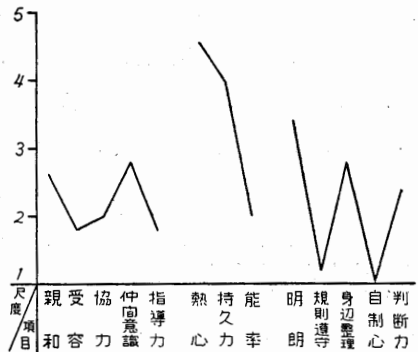


図6 *Tom* の行動評価プロフィール



イブのものは、しかしながら、きわめて少数でしかない(図5参照)。

RH型は、友人関係において他者から拒否されるような、共通の顕著な人格特性を示しているものを含んでいる。すなわち、彼らは大部分、強い劣等意識をもち、癇癪もちで口やかましく喧嘩ずきで、しかも、執拗であるといった強い傾向を示している。また、なかにはフォーマル・インフォーマルな集団規準を侵すがごとき行動特性のものたちもいる。それ故に、他の者は彼らとかかわりあえば、なんらかの悪影響をうけるので、彼らは友人関係において、他者から疎んぜられ拒否される結果を招いている。かかる人格特性をもつものは、たとえば、図6にあげた寮生 *Tom* (表10参照) の場合に典型的にみられる。つまり、このような疎遠な拒否的な人間関係のあり方自身、彼らの社会的空間を狭ばめ、自由な自我の活動領域を制限し、それが必然的に彼らの人格性の発達を遅滞せしめていると考えることができる。 <西岡忠義>

§ 4 以上において、信楽寮における寮生たちの友人関係の構造、そのタイプについて、ソシオメトリック・テスト、行動観察、面接調査(職員および寮生との)の具体的操作を通して、その事実を把握し、当施設における友人関係は、一般的に浮動的であり、外的なエコロジカル

* 各項目は簡略に表現した。詳しくは表9を参照されたい。

な力によって支配されやすく、選択のモチーフは自己志向的であり、また、そのタイプも比較的単純で、変動しやすい性質のものであることを述べてきた。しかれば、かかる友人関係のあり方、その構造は、彼らの人格性の発達、世界への自己の投げかけかたと、いかなる意味的なかわりあいをもっているか。われわれは、このことを教育的状況性ととの構造連関において、しばらく考えてみよう。

(1) まず第一に云えることは、信楽寮におけるフォーマル・インフォーマルな人間関係、価値関係の基本構造は、きわめて単一的であるということである*。云いかえると、彼らの友人関係のあり方は、フォーマルな価値の力によって限定されやすい状態にあるということである。かかる様相は、寮長をはじめとして職員の間で醸成されている教育的雰囲気、教育価値、教育的態度が、インフォーマルな友人関係によって抵抗、阻害されることなく、寮生たちの間に湧きでる生活感情や雰囲気を支配しやすい状態にしていることを意味している。

(2) しかしながら、友人関係がこのように極めて可変的であるということは、彼らの人格接触が一般に表面にあらわれた (overt) 行動領域に停滞しており、内面的なふれあいの間柄性が貧しく、また、心情性のゆたかなコミュニケーションに乏しいことを意味しているといえることができる**。従って、かかる友人関係の形態においては、彼らどうして相互に分ちあい、刺戟しあう価値の位層は、“行儀をよくする”“履物をそろえる”“掃除をする”“整理整頓をする”といった行儀作法的な行動の型(9, 104頁)としての、紋切り型の価値範型にとどまることが多い。そして、かかる型の行動が、彼らの存在構造の基本柱として強化されているように感ぜられる。われわれの了解しうる限りでは、もちろん、寮生 Tak のごとく(本文 28 頁～40 頁参照)、人格の内面的成長とともに、自己自身について、また、他者との間柄性についての自覚と自己意識が深まってくるものもある。しかし、その場合でも、それは彼自身の主観内に内在的に閉じこめられていて、客観的な顕在的な行為としてのふれあいにはまでは展開しないのである***。

(3) 以上のことから直ちに、信楽寮における友人関係は、彼らの人格性の発達に対して積極的な意味をもたないということは、しかしながら、できない。というのは、われわれは、すでに、友人関係のヒイラルヒーとしていくつかのタイプを設定してきたが、この場合、CH 型のものがとくに重要視されなければならないからである。それは二つの意味においてである。第一は、前述したように、CH 型になること自身、彼の成長、発達を意味するからである。第二は、このタイプのものは知的機能の正常なるもの(身体障害者)、もしくは、限界地帯に属するものたちで

* この点、少年院や刑務所のごとき強制場面における人間関係の二重構造性とは対蹠的なあり方を示している(1)。

** 正木は道徳性の発生機序として、“行動の型と習慣”“心構えと態度”“道徳的心情または情操”“自由と責任と人格”の五つの領域をあげている。いま、ここで、精薄児の道徳性について論ずる意図はないが、しかし、かかる領域の考察は、人間関係の間柄性の深みの位層を考えるにあたって、示唆的である(9, 104頁～111頁)。

*** 精薄児教育にあたって、かかる事態をいかにして越えさせるかということが、今後の教育的課題となる。

あるが、このCH型のものたちこそまさに、寮生たちが描く理想的なモデル・パーソナリティとなっている現実があるからである。後にのべるように（本文26頁～28頁参照）、寮生一人ひとりがかつて遭遇する時期によって、その意味する内容には違いがあろうが、“僕も何某さんのようになりたい”と寮生が念願する“何某さん”は、このCH型のものである。もちろん、彼らは他の寮生にみずから積極的に働きかけたり、指導したりするわけではない。にもかかわらず、おのずからの接触のうちに、他の寮生の世界のなかに、自己の将来に対する期待と時間眺望を芽生えしめ、寮の全体的な生活体系における自己の位置を意識せしめるのに、与って力がある。この二つの点において、CH型のものが当施設において果す役割と意味とを勝れてとりあげたいと考えている*。

(4) 友人関係のヒイラルヒーの問題と連関して、最後にもう一つ指摘しておきたいことは、職員と寮生との間柄についてである。寮長をはじめ職員が寮生に対して志向している教育的心構え、教育理念については、すでに申し述べた（本文10頁～13頁参照）。それに対して、子供たちが職員に対していただいている基本的態度は尊敬、信頼、従順の態度**であるということができる。友人相互間には、対立、拒否、疎遠の間柄性ができるにしても、職員との間柄においては、それらは殆んど見受けられない現状である。このことは、(1)に述べたことと連関して、教育価値の滲透の仕方、人格性発達と価値体系との機能的関連のあり方についての考察に、一つの示唆を与えてくれると思われる。すなわち、職員のいただいている教育的配慮、教育的価値規範が寮生の人格的成長に対して、いかにして水路づけられるかということは、結局、友人関係のもつ全体的な力学構造を基盤とはしながらも、しかも、職員と子供たちとの間におのずと出来あがっていく一対一の直接的なふれあい（これこそ教育状況における人間関係の本来的な間柄性と思う）を排除しては考えられないことである。この点にこそ、彼らの人格性の発達と教育的状況性との意味連関が存在するし、また、精薄児の場合には、かかる間柄性のあり方こそ、ことに勝れてとりあげられなければならない理由がここにあると考えられる。池田氏の三つの教育の姿（本文10頁～12頁参照）も、かかる意味のコミュニケーションの領域にこそ、きわだって浮びあがってくるのである。

＜高瀬 常男＞

* たとえば、Karのごとく（本文22頁参照）、フォーマルな役割が与えられることによってCH型に主体的に成長していったものもある。この場合、いかなる者にいかなる役割を課するかという洞察が、ことに精薄児教育にあたって、重要な意味をもつと云わなければならない。

ここでは、積極的な教育的価値力となるが故にCH型をとりあげたが、その他の各タイプも、それぞれの存在理由と、作用をもっているにちがいない。たとえば、RH型は、ただ単に“嫌い”という感情関係にとどまるのではなくして、それが文化的価値規範についての意識を他者に自覚せしめるにいたるとき、人格性発達に対するRH型の教育的機能をくみとることができる。しかし、われわれの現今の研究段階においてはまだ、その把握にまで、到達していない。

** この意味する内容は各主体によって異なったすがたをもつていよう。あるいは、無自覚的な行動範型としての自己表現から、自覚的なものにいたるまで、さまざまなあり方を示すであろう。しかし、われわれは、彼らの態度観察を通して、上記のような尊敬・信頼・従順という一般的態度表現を観てとったのである。

5. 寮生の主体的世界の構造

§ 1 ここでは、寮生主体の個別的、特殊的事態が問われる。すなわち、寮生ひとりびとりが辿ってきた人格性発達の道すじをあらわにし、彼らが逢遭し、みずからを投げかけている世界の基礎構造を、事例史的に開明しようと思う。これは序論において投げかけた問いA（本文2頁）に示唆を与えてくれるであろう。この調査研究に踏み入るに先だち、われわれは、あらかじめ寮長池田太郎氏にお願いして、(1)就職者にして入寮後2年以上経過し人格変容の顕著なるもの5名、(2)未就職にして入寮後2年以上経過し人格変容が明確にとらえられるもの5名、(3)入寮以来2年以上経過せるも人格の成長に目立った変化を示さないもの5名（この場合には就職者、未就職者を問わない）を指摘して頂き、合計15名の各々について、行動観察、面接調査（指導員、保母、当該寮生との）、保母日誌および児童簿の閲覧をもとにして、できうるだけ具体的に、しかも詳細に彼らの全体的人格像を把握し、また、それをできうる限り生き生きと描写せんとつとめた。さらに彼らが家族へ書き送った手紙の分析^{*}をおこない、彼らの内面的世界の変化様相と変化の意味構造とを了解的に把握せんとつとめた。

以下において、信楽寮の寮生たちの極めて一般的なエゴの構造とエゴ・オリエンテーションの歴史的変動様相について述べ、つぎに具体的事例に触れていく。しかしながら、15名のひとりびとりについて事例の敘述を繰りひろげていくことは、紙幅の都合上ゆるされない。そこで、今回は寮生 Tak の事例のみに焦点を合わせ、他のものについては、表10 および 表11 に大雑把な輪廓を粗描するにとどめた。このことを、あらかじめお断りしておく。

§ 2 寮生の一般的なエゴ構造とエゴ・オリエンテーション 信楽寮における教育的価値状況は、施設の全体的な体制の変化とともに、歴史的に生成発展の道程にあり、二つの時期を経て、現在は第三の時期に当面していることは、すでに述べた。このような価値のオリエンテーションの歴史的変動は、寮生一人びとりの主体的世界のなかにおいても繰りひろげられると考えられる。彼らが入寮以来の生活過程において、あるいは出会い、あるいはみずから劃していく時期について、四つの時期的推移過程を設けることができる^{**}。そして、これの推移自体は、同時に、主体の生活空間における時間展望の推移をも意味しており、また同時に、彼らの自我構造の変容、エゴ・オリエンテーションの決定、および、その明確化に対して作用している。

第一の時期は、エゴ・オリエンテーションの未決定の時期である。いま、エゴ・オリエンテーションという用語を用いたが、ここでは、信楽寮の全体的な教育状況、精神的状況のなかにおいて、寮生ひとりびとりはいかなる自我の方向づけ、自我の志向性をもっているか。しかも、方向

* 手紙分析 (Briefanalyse) の方法論については、本文37頁～38頁を参照されたい。父兄のかたがたの御好意により、われわれはナマの資料（手紙・葉書）を入手することができた。

** すべてのものが同様に、この四つの時期を経過するとは限らない。たとえば、第一～第二の時期に停滞しているものもあれば、第一～第二の時期は短期で、すぐにも、第三期に入るものもある。主体の構造いかなにより、そのあり方はさまざまである。

づけられ志向された自我は、彼らの世界構造において、いかなる領域、位層に位置づけられ、しかもそれは自己の行為の展開に対して、いかなる機能をもっているかということである。そこで、この第一の時期は入寮当初の時期であり、彼らの生活空間における認知的領域には、未決定領域が支配的である。従って、当施設状況のなかにおいて、彼らのエゴ・オリエンテーションは確立されておらず、また、彼らの自我構造は入寮前において形成されたレディネスを優位的に包含していると考えることができる。かくして、新しい世界への自己投入は過去の世界との連続性の分離をもたらし、自我の支えは不安定状態にさらされる。この時期における彼らの一般的行動像は、作業に集中できず、部屋にうずくまり、構内を彷徨する、といった姿を示している。そして、フォーマルに割りあてられる作業内容も、非常に単純な粘土の型押し（たとえば箸置き、コンロの巢など）とか、雑役（薪運び、製品の運搬など）の域を出ない。従って、全体的な価値状況の認識、理解も浅く、職員や寮生との自発的コミュニケーションも乏しく、生彩に欠けている。

第二の時期は、作業への動機づけが積極的になるにともなって彷徨的な行動像は消え、行動全体が日々の日課に従って行動的にはおのずと統制されてくる時期である。そして、朝8時から夕5時まで、粘土を手にし、機械をまわす行動を通して、“作業をする”“働く”ということが彼らの自己意識の深みのなかによりやく沈澱しはじめ、それが自我機能として、全体的な人格行為と影響関係をもちはじめてくる。つまり、“作業”を中核にして展開される当施設の全体的な価値体制に対してのエゴ・オリエンテーションがよりやく可能となり、それによって、新しい生活構造が構成されていく時期である。職業教育が彼らの人格に滲透する芽生えをみせるのも、この時期である。かくして、彼らの生活空間においては、就職という事態への期待的態度と目的意識が、徐々に形成されてくる。序論においてもふれたように、機械ロクロの前に立つと、もはや精神薄弱児とは思われない行動像をあらわし出すのも、この時期においてである。第一の時期における作業内容は、“型押し”“雑役”が主であるが、第二の時期においては、機械ロクロと一対一の関係のもとに、“汽車土瓶”“ソバどんぶり”などの製造、仕立げに移行していく。要するに、この時期において、彼らの自我は、当施設の全体的価値秩序によって、積極的に支えられ、世界安定の姿を呈してくるのである。

第三の時期は、作業技能が上達してくるとともに、それをみずからも自覚し、他者によってもサンクションされる。そして、それによって、“就職”に対する時間的眺望が分化し、それが現実的水準において、彼らのエゴ・オリエンテーションに機能するとともに、信楽寮の全体的生活場面における彼らの地位が高められてくる時期である。彼らの自我の期待領域には、施設内の作業の枠組をこえて、就職という公共社会的な価値体系への志向性が芽生えてくる。ここに、自己認識の深まりの契機がみられるのである。この時期における作業内容は“火鉢”“土瓶づくり”**

* 身体障害者の場合について触れておきたい。彼らのなかには、身体的状況によって、機械操作の不可能なものもある。かかる場合には、“型押し”とか“ひねり”で一貫していく。また、身体障害者以外のものでも、陶器製作作業に不向きなものもある。それに対しては、“雑役”“運搬”のごとき作業内容が各時期を通して与えられる場合もある。

** この時期においては、作業内容は第二の時期と同一でも、生産量、質の点では格段の進歩がみられる。

が主である。

第四の時期は、就職の時期である。すでに職に就き、一定の安定した作業に従事することによって、彼らには、公共社会の人間としてのエゴ・オリエンテーションが可能になってくる。すなわち、新たな人間関係を契機として、新たなより深い世界像がつくられていく。たとえば、勤め先の奥さんが病気になると、それに対する同情、配慮がなされたり、また、“自分で工場を経営したい”“結婚したい”といった自己展望が生じてくる。もちろん、その意味する内容は単純で幼稚なものかもしれない。しかし、かかる自己展望のうちに、自己の独立という価値のオリエンテーションがつくられてくるとともに、他我に対しても受容的となり、社会人としての生活についての知恵や洞察が彼らなりに芽生えてくるのである。

この四つの時期の長さは、もちろん、すべての寮生にとって一律的なものではなく、きわめて個人差に富んでいるし、また、人格のいかなる内面的深みにおいて、それが機能するかも様々であるが、ともあれ、彼らはそれぞれ、このいずれかの時期に歴史的に逢遭すると考えることができる。

しかし、ここでとくに留意したいことは、“この時期は普通人の何歳に相当する”とか“普通人のどの発達段階にある”といったような、形式的な比較対照でもって、ことを済ませたくはないということである。精薄児は彼らなりの纏まった全体的な人格体系をもち、それを展開し、また、彼らなりの纏まった自我構造、エゴ・オリエンテーションの変動、発達を示していくからである。そして、それらの様相を、教育的状況性との意味連関において追求していくところに、われわれの問題意識があるからである。

表10 および 表11 は、今回の調査研究の第一段階としてとりあげた15名の寮生についての人格像変容の姿を、きわめて大雑把に示したものである。

§ 3 人格性発達の具体的あとづけ 寮生 Tak の場合 (1) 全体的人間像の粗描 昭和28年4月1日、Tak は友人2名(同級生)とともに、東京都立青鳥養護学校中学部から信楽寮に入寮した。年齢16歳9カ月のときである。このときの模様について、つぎのように伝えられている。『……着くと間もなく招かれた事務所の火鉢のそばで、Tak が、「先生、この火鉢の色はエナメル仕上げですか、絵具ですか」と第一問を發して、あちらの(信楽寮の 執筆者註)先生方におどろかれ、所内の工場や窯場に山と積まれた汽車土瓶や大小の火鉢の群に、「先生、この火鉢は皆な注文ですか、皆な売ってしまうのですか」と質問してふたたび感心された。……』(7, 222頁)。知能指数は54(WISC: 言語65 動作50 昭和32年8月現在)。モンゴリズムにして、それ特有の相貌、体軀を有し言語障害(モンゴリズムにもとづく)がある。几帳面な性格であり、根気強いが、活動は活発というよりもむしろ鈍重である。手のうごきも器用ではない。入寮後すでに5年有余を閲みしており、現在、授産場に就職している。月額平均3,000円の手どりがある。ソシオメトリック・タイプCH型に属する(昭和33年7月現在)。職員による行動評価(本文20頁~21頁参照)の結果(昭和32

表10 各主体の示した人格性発達の様相（その1）

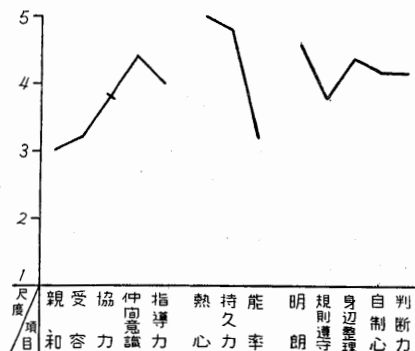
名 前	Tom *	Kej *	Suk	Sim	Tak *	Tke *	Kyo
生 年 月 日 〔満 年 令〕	昭7. 2. 28 〔25: 8〕	昭10. 7. 5 〔22: 3〕	昭12. 9. 8 〔20: 1〕	昭12. 9. 19 〔20: 1〕	昭11. 7. 7 〔21: 3〕	昭12. 4. 18 〔20: 6〕	昭12. 5. 28 〔20: 5〕
入 寮 年 月 〔当時 年 令〕	昭27. 7 〔20: 5〕	昭27. 7 〔17: 0〕	昭27. 7 〔14: 10〕	昭27. 7 〔14: 10〕	昭28. 4 〔16: 9〕	昭28. 4 〔16: 0〕	昭28. 5 〔16: 0〕
入寮前の経歴	近江学園	石山学園 近江学園	近江学園	石山学園 近江学園	青島中学	淡海学園	
家族状況		継母	父母死亡	父母死亡		父母死亡	
経済状態** (3段階)	上	中	下	下	上	下	中
愛情程度** (5段階)	5	3	2	1	5	1	2
理解程度** (5段階)	5	3	3	1	5	1	3
知能指数 (WISC)	54 {V.60 P.55}	91 {V.85 P.102}	90 {V.76 P.112}	94 {V.84 P.109}	54 {V.65 P.50}	58 {V.54 P.73}	46 {V.47 P.55}
身体状況	小頭症 左側マヒ				モンゴリズム		脳性小児マヒ 右半身
生 活 場 面	作 業	不器用で力仕事 しかできないが 作業意欲や持久 力があり力のある ことを自慢する (1: 6)***	一人前として充 分通用する能率 をあげるようにな り就職する (2: 10)	一人前として充 分通用する能率 をあげるようにな り就職する (3: 6)	まじめさに欠け ていたが就職の 3~4カ月前から 真剣になる 能率は一人前 (3: 2)	不器用を克服し て能率を高め与 えられた仕事に 責任をもつよう になる (2: 0) 就職 (3: 2)	技術は駄目だが 補助者としての 段取りが極めて よい (1: 6) 就職 (2: 7)
	規 律				意識的にするけ ようとしていた 点なくなる (3: 6)	当番や肥持など 嫌な仕事を逃 げる点なくな って先頭に立 てするようになる (3: 4)	
	整 頓 清 潔		自分の身のまわ りだけから部屋 全体へと関心が 拡がる (4: 6)		非常に乱雑であ ったのがよく整 頓するようにな り清潔にも留意 するようになる (3: 6)		汚れた衣類を天 井や階段下に突 込んでおくこと がなくなる (3: 4)
	対 職 員	ハキハキと表現 するようになり (2: 11) うちとけてきて 悩みを相談する ようになる (3: 6)	無口であったの がうちとけてき て話しかけたり 冗談をいうよう になる (3: 6)	避けるようなと ころがあったの が話さるようにな り (3: 0) 挨拶がしかり できるようにな る (3: 4)	理窟よく素直に うけいれないと ころがあったの が角がとれてき た (2: 0)	話しかけても相 手の顔をみつめ るだけであった のが応答するよ うになり (1: 0) 自分から 話しかけてくる (3: 4)	目上の者の関心 を迎えようとす る卑屈な愛想よ さやお世辞が少 なくなった (4: 0)
	対 友 人	いつもからかわ れ役きられ役で すく怒り喧嘩し ていたが職員に 訴えにくくこと もあるようにな る (4: 6)	馬鹿らしいから 相手にしないとい う態度があっ たのがリーダー として積極的に 音頭とりをする ようになる (2: 11)	弱い者の気持を 察し部屋長とし てよく面倒をみ てやる (2: 7) 就職後面倒をみ ないという態度 に変わる (3: 8)	ファンといった態 度であったのが 管の前で歌った りキターをひい たりするようにな る (4: 0)	寮生の一人とし て積極的に皆と一 緒に行動しようとい う態度が出てきた (3: 4) しか し再び皆から遊離 する傾向を生ずる (3: 6)	発作的な暴行性 を発揮すること もあって相手に されなかったの が自らつとめて 二三の友人をえ た (2: 7)
	余 暇	もとの就職先へ 遊びに出かける (4: 0)	余暇を楽しむ方 法を見出そうと する (2: 7) 家族との間をよ くしようと努め 改善する (3: 2)	余暇を楽しむ方 法を見出そうと する (2: 7) 現場の先生の同 親に心配ごとを 相談しにくい (4: 0)	雑誌をとりはじ める (3: 6) 絵を描きはじめ る (4: 10)	手紙や日記を丹 念に書かなくな ったが内容には 出来事の叙述から 自己表現的にな ってきた (2: 6)	雑誌をとりはじ める (3: 0) 食物などの盗み がなくなる (3: 8)
印 象 像	印象像に変化は ない。しつこく 俺は偉いと思い こんだ横平な言 い方を生一本で 憎めない	線が細くどこか 暗さを感じられ たがしっかりし て明るくなる	消極的で弱さが あったのが明る くなり茶目気を出 してきた	表情が明るくな り朗らかさを増 す	融通がきかず話 し方が尊大であ ったが角がとれ て分別くさくな ってきた	目つきの悪さが とれる	卑屈さや目の色 をうかがうこと が少なくなっ てやや明るくな る

* 本文中に援用した寮生。 ** これは、それぞれ、家庭の経済状態、家庭の愛情程度、家庭の理解程度を意味する。 *** 変化があらわれるまでに経過した入寮後の年月を示す。 なお、表10および表11は安原宏が作製した。

表11 各主体の示した人格性発達の様相（その2）

名 前	Sig	Hir	Kar*	Ish	Gor	Tyu	Kji	Soh	
生 年 月 日 〔満 年 令〕	昭13.12.31 〔18:10〕	昭13.4.22 〔19:6〕	昭14.10.13 〔18:0〕	昭15.2.8 〔17:8〕	昭15.6.2 〔17:4〕	昭13.3.3 〔19:7〕	昭17.3.25 〔15:7〕	昭16.6.30 〔16:4〕	
入 家 年 月 〔当時年令〕	昭29.4 〔15:4〕	昭29.11 〔16:7〕	昭30.4 〔15:6〕	昭30.4 〔15:2〕	昭30.6 〔15:0〕	昭31.4 〔18:1〕	昭31.4 〔14:1〕	昭31.8 〔15:2〕	
入家前の経歴	近 江 学 園	中 学 校		近 江 学 園	旭 出 学 園		近 江 学 園	日向弘済学園	
家 族 状 況	母 死 亡		母 死 亡	父 精 薄 者 母 死 亡			父 死 亡 母 精 薄 者		
経 済 状 態 (3 段 階)	下	中	下	下	上	中	下	中	
愛 情 程 度 (5 段 階)	3	5	1	1	5	3	2	3	
理 解 程 度 (5 段 階)	3	5	2	1	5	3	2	3	
知 能 指 数 (WISC)	不 能	86 {V.91 P.84以上}	51 {V.58 P.54}	39 {V.53 P.39}	45 {V.43 P.61}	34 {V.47 P.34}	46 {V.43 P.62}	39 {V.40 P.53}	
身 体 状 況	脳水腫の傾向 がある	アテトーゼ			小 頭 症	脳性小児マヒ 左半身		テンカン 構音障害	
生 活 場 面	作 業	意欲が全然なかったのが製品運に 興味をもち自分の職分を果たす ようになる(1:6)	手不自由を克服して理の型押し を一人で完成するように自信と責任感と働く 喜びをもつ(2:6)	平凡な進歩	不器用で見込みなしと思われた のが普通なみの能率をあげるよ うになる(1:6)	作業意欲が乏しくウロウロ歩きま わっていたのが待機に固定する ようになりある程度の能率をあ げる(2:0)	作業意欲が全くなかったのが後 始末などよくして第二成型では 間に合う存在と認められる (1:2)	平凡な進歩	作業意欲が乏しかったのが普通 程度に出来るようになる (0:10)
	規 律	全然守れなかったのが昔について できるようになる(2:0)				守れなかったがやや良くなった (2:0)			
	整 頓 清 潔	着換えを自分でするようになる (2:2)	毎食後歯みがきをはじめる (2:6)	数回に一度位しか入浴してなかつ たのが毎回入るようになる (2:0)		気がむくと洗濯をはするよ うになる(1:3)	身の廻りに無頓着であつたがや や関心がでてる(1:3)	食後の箸洗いを励行しはじめる (1:0)	清潔さに無関心であつたが良 くなった(0:10)
	対 職 員	用を言いつけるに必ず「知らん 」と言っていたのがハイと言ふ ようになりまた話しかけてくる ようになる(2:0)	うちとけてきて機智にとんだ冗 談やフザケをするようになる (2:3)	「誰かやらないか」というとすぐ 「僕がやる」と応じ寮外への 使いも十分果して貴重な存在と なる(1:0)	黙って返事もなかったのがズバ ズバとものいうようになり (0:6)甘えて飛びかかってくる ことも自発的に手伝いをする ようになる(2:0)	用もないのに事務室にくること 少なくなり(0:4)甘えて飛びか かってくることも少なくなる (0:6)	用を頼んでも相手をつめるだけ であつたが自ら求めてくるよ うになり(1:0)話をしかけてく る(1:3)	炊事の仕度・片付け・掃除など を自発的に手伝うようになる (1:0)	黙ってそっと寄風という甘え方 をしていたのが目立たなくな る(0:11)
	対 友 人	全く無頓着だったのが仲のよい 友人ができ(1:0)皆について協 調的に行動できるようになる (2:0)	ある距離を保ちつつ内面的に気 のおんな者として深く新入寮 者があればこの基準で選択す る(0:6)	微々たる存在であつたのがうる さい者にも卒直にズケズケと 口出しをし他人の世話をする ようになる(1:6)	思ったことをズケズケというよ うになる(0:4)言ひ方に悪気 がないので喧嘩にはならない (0:4)	三才の坊やとよく一緒に遊んで いたが接触が少なくなる (1:1)	交友範囲がだんだん拡がって いる(1:0)	同年に入寮した者と交わって いたのが一年先輩組とも交 わるようになる(0:9)	喧嘩しても泣きべそをかくだけ であつたが大声を出すよ うになった後から入寮した 者との関係でいくらか兄貴 分らしいさがでる(0:11)
余 暇	帰省中はじめて家の手伝いをする (1:4)余暇は寮内にフラフラ歩 きただけであつたのが寮外へ 出るようになる(2:0)	音楽を好み俳句も作ったりして いたが自発的に学習意欲が高 まってきた(2:6)	たいいてい職員寮の近所のオート 三輪の掃除を手伝う(1:0)		絵を描くことから雑話の切り抜 きにかかわる(1:6)字の学習 があつた後で母にはじめて手 紙を出す(1:9)	こそこそとイタズラしていたの がなくなり職員の手伝いをする ようになる(1:0)	職員の手伝いをしたり裏山へ散 歩に行く(1:0)	三才の坊やとよく遊んでいた が接触が少なくなる(0:8)	
印 象 像	いつもフラフラと落着きかなくな つたのが落着いてきて和やかに なる	はしゃぐことがなく我が強かつ たのが薄れて明るさを増した	痛々しいくらいに子供らしくあ つたのが分別くさく青年らしく なる	どこか縁の弱いところがあつた のが快活になる	甘えてはしやきまわり少しも落 着かなかったのが落着いてきた	若さと精気がないけけで陰気な 感じがなくなり笑ひと明る さがあつてきた	チョコチョコしていたのが落着 いてきて身体も伸びて青年ら しい相を備えてきた	グジグジした煮えきらないと ころが消えてきて健康的に なる	

図7 Takの行動評価プロフィール



年10月現在)は図7に示した。

入寮までの生いたち* 昭和11年7月7日, Takは同胞7人の第5子(兄2人, 姉2人, 妹2人)として, 東京都に生誕し, 恵まれた家庭状況と両親の豊かな愛情のもとに生い育ってきた。両親ともさっぱりとした, 明朗な人格のかたときいている。われわれがTakとの面接から推測するところでは, 家庭における躾, 教育は折目正しい感じをうけている。

Takの精神・身体的発育の遅滞, 異常が明確なすなわちをとり, 両親に認知され, 意識化されるにいたったのは, 彼の4歳の頃である。母親の手記には次のように書いてある。

Takは四歳になっても口がもどかしく, 誰を呼ぶにもパーパーで間に合せていました。耳の方はよく聞えるらしく, 誰よりも早く来客の気配を聞きつけて, 袖を引いたり指さして教えたり, ちょっとの物音にもハッと反応してみせ, 啞にはできない自動車の音や, 犬, 猫, の擬声などもできるのに慰められていましたが, やはり不安はつのる一方で, その春初めて, 附近の官立病院の小児科を訪ねました。……しかし, サザエが蓋をしたようなTakの口は, 二月たち三月たっても, いつかな開きません。(7, 109頁)

しかし, どの医師も真実を言ってはくれない。Takが生後8ヵ月のとき水痘にかかり, そのとき数日続いた39度の高熱, それが精神・身体的発育の遅滞, 異常の原因かもしれないと, 両親は不安と回復の期待のうちに, そう考えていた。やがて, 小学校入学の時期が訪れる。このときはじめて校医によって“精神薄弱児”と診断される。しかし, このとき, 両親はこの意味がはっきり捉えられない。

……精神薄弱……何のことでしょう。何となく胸さわぎがしてお尋ねしましたところ, 校医はなぜか, 答えをさけられたふうで……。このとき先生のお口から説明されていたら, これからの子供の処置について相談もでき……親としてできるだけの手はつくしてやれたでしょう。(7, 193頁)

Takの口からは未だ言葉が出てこないままに入学を一年延期する。しかし, “一年たつうちには”との希望もむなしく, さらにもう一年延期し, 二年後の春(昭和20年)妹とともに, ようやく小学一年生となる。米機による本土攻撃のたけなわな時であった。そして, 間もなく, 富山県高岡市へ疎開の道をたどる。

せっかく二年も延ばしたTakや妹のため, 学校らしい学校への願いは, 私の中で異常なまでに烈し

* 入寮にいたるまでの資料は, いまのところ, 直接われわれの手で得られてないので, 本文の“入寮までの生いたち”の部分に関しては, 文献7を参考とした。

く、戦争では一步も東京立退きを考えなかった私も、子供たちのため、未空襲の地方なら学校もやってゆけるにちがいないと考えて、疎開を決意しました。(7, 199頁)

やがて終戦を迎える。そして、半年ぶりで東京に戻り、再び東京の小学校にて学ぶこととなる。しかし、大多数の精薄児がそうであるように、Tak もまた、学校では劣等生であり、遊び友達もない淋しい存在者、しかも学校でも近所でも、馬鹿もの扱いのなぶりものでしかなかった。かかる状況は、もちろん、彼の劣等意識を強化し、暗い人格を形成せしめる結果となる。と同時に、家庭における彼への配慮、保護は、逆に彼をして利己的、狡猾、傲慢、尊大ならしめることとなる。

“お客様あつかい”のまま小学校を卒業し、先生のすすめもあって、昭和26年4月、東京都立青鳥養護学校中学部へと進学する。ここでの教育は Tak の学力の向上、人格の成長への芽生えを誘引する強い力になったと観ることができる。中学1年の成績は、1学期は良の下で席次は9番、2学期は良の下で3番、3学期は良で5番という進歩を示した。また、人格像にも変化をもたらし、母親をして、つぎのように語らしめている。

一年間の中学生活の間に、Tak はぐっと大人びて、もう何かというと涙ぐんだり、甘えて先生にまっわりつくこともなくなりました。(7, 215頁)

中学の生活になれるにつれ、自信と誇りが彼の自我意識の層に芽ばえ、育ってくる。学校においても家庭においても態度の明るさが観てとられるようになる。近隣においては依然として馬鹿者あつかいであり、家庭ではいつ知らず兄弟たちにもまれ、劣等感は消え去るべくもない。

その頃の Tak には、家族も明るい気持で対していましたが、一步外へ出て見る Tak の姿は、やはり淋しく、通学の途中、わき目もふらず歩く Tak は、友だちに会おうと、つと道を横切って向うへ渡るです。(7, 215頁)

精薄児にもまた青年期があり、それ特有の精神-身体的現象を呈すると、われわれは考えたい。われわれが信楽寮に行つて感ずる彼らの“たくましき”は、なによりもまず、彼らが青年になったことを告げている。彼らには彼らなりの希望、期待、苦悩、思いわずらいがあり、彼らは彼らなりの自我の動揺、自我の拡大を経験すると思われる。Tak の場合にも、この少年期を巢立つ日の危機があった。学校では授業をさぼり、“給食を食べなかったり”、“箸をつけても文句ばかりいう”。“家に帰ると寝ころんでばかりいて”なに一つしない。“叱っても、言いかせても”反抗的態度を示すだけで、“少しも改まらない”。先生も手を拱ねくばかりであった。正常なる知的機能を有するものなら、みずからの理性的判断、意志、自覚、決意において、みずからこの危機をのり越えることができよう。Tak の場合は先生と両親との異常な努力によって、ようやくもちこたえることができた。しかし、自らの力によってというよりも外からの力によってであり、もちこたえではあっても超克ではない。信楽寮へ入寮当時、職員に与えた“明るい見通しが

立たない”という印象は、彼の手先の不器用さ、利己的で尊大な態度、友だちや近隣の人びとによって痛めつけられてきた暗い影、そして、いまだ内在しているこの危機の姿、そういった彼の全体的姿から与えられたのかもしれない。

やがて卒業も迫ってくる。入学以来、彼の成長には目覚ましいものがあった。パルプ細工に喜びを見い出して熱中し、学芸会の劇の役割をこなし、耳の不自由な友人の世話をする。しかし、これが彼の精一杯の努力でもあった。また、この中学の特殊教育が彼に対して与えうる教育の限界がここにあったと考えることもできる。

危機を持ちこたえた *Tak* の、その二学期の努力賞は、かなりよい方でした。けれども評の言葉には、「今のところが *Tak* 君の最上の線ぎりぎりと思われる」とあって、これ以上は、いくら努力しても駄目なのかと思うと、*Tak* の姿が痛ましく、衰れを誘うのでした。（7, 218頁）

こうして彼は青島養護学校を無事卒業し、先生の推薦により、級友2名とともに信楽寮へと出発する。*Tak* を手離すについての母親の心配、思いわずらいには並々ならぬものがあった。しかし、父親の決意と兄弟の同意が、やがて彼を旅立たすにいたった。〈高瀬 常 男〉

入寮後現在まで さきにもふれたように、彼の入寮当初の印象は、明るい見通しのあるケースではなかった。彼ら3名は同室に配置されて一緒に行動することが多いのは、むしろ自然であったが、寮生の目には、彼らが上等の身廻り品をもっていることにからんで、“東京組”と特別視し、相当期間、反感をもつことになったのであるが、これには *Tak* の言動が尊大な印象を与えることも、一役買っていた。*Tak* は東京組の兄貴株を気取り、よく世話をやくのだが、行き過ぎて迷惑がられると、したり顔で「言うことをきかないんです」と、職員に告げるような押しつけがましい一人よがりな面があった。しかし、生活態度は几帳面で、かつちりと粋にはまっていた。衣類、所持品をきちんと整理し、一日の作業を不器用だが根気よく済ませて、夜になると必ず日記をつけた。感想などは一切入らない行動の羅列だけであるが、いい加減に済ませられず、一晩中かかって書こうという態度。家への手紙も紋切り型の面も若干あるが、よく出した。このような生活態度は、室長（貞山氏）の影響が大きかったと思われる*。この室長はかなり年長の身体障害者で、知能は正常、敬虔なクリスチャンであって、同室のものの面倒をよくみてやり、日記の指導もしていたのである。*Tak* はこのようなかつちりした生活態度を示す反面に、ずるい頑くかな一面が目立っていた。陶器作業はまじめにやるのに、薪運びや肥持ちはいつも執拗に逃避し、言いつけられた用事は他人に廻わしてしまい、当番としての義務も怠る。さらには、家庭から送られた菓子は皆に分配するという取り決めがあるのに、仲のよい友人だけに分けたり、こっそり隠しておいたりして、言いきかせても、なにかにと理窟をいって素直に聞き入れようとしなかった。

* 本文39頁参照。

以上のような行動は約2年間続いたのであるが、この間に、父親が精薄教育に尽力していることを自負し、自分は幸せだというようになり、信楽寮内での行動像の変化として職員の目にまず映ってきたことは、*Tak*のかげが薄くなったということであった。すなわち、生活場面での彼の言動が、今までのように目障りにならなくなってきたのである。やがて、作業場面では一番よく頑張るということが認められるにいたり、同時にこの頃から日記や手紙を書く回数が急激に減った(表12参照)。作業に力を入れて疲れるためと、さらには、家族への依存性から独立し、寮生活になれて安定してきたからであるとみられる。しかし、後で詳しく述べるように、内容は紋切り型から感想のまじった充実したものに変ってきて、「日記は他人に見せるものではない」といい出したり、はじめは兄の結婚の祝い状に、「僕のことを忘れないで下さい」と書いたりしたのが、後に姉が嫁いだときには、「どうぞ仲野家のことは忘れて、幸福にお暮らし下さい」と記して家族を驚かすようになった(手紙について詳しくは後述する)。入寮後3年目に就職したが、それから2カ月程後には、あれ程さぼった肥持ち作業を卒先してやるようになった。また、彼は焼き魚を食べるとジンマシンが出るが、間違って彼の食卓に出されたとき、今までなら文句を言うのに、折角つけてもらったのだからと、別な品と取り替えるのを断ったりして、態度全般に、寮生の一人として皆と行動をともにしようという気持が現われてきた。就職先でも、技術も向上し、仕事には誤魔化しがなく安心してまかせておけると信頼されている。

われわれが行なった面接では、精一杯に頑張るという意識が強く支配していることが窺われた。就職後、彼には、他の寮生にとけこもうと努める態度が再び退行したが、しかし、それも、昼間体力の限度まで使ってしまい、帰寮してからは余力がなくなるが故にと考えられる。また、父母を深く尊敬し、自分は幸福であるという気持をはっきりもっていることも窺われたが、全体の調子としては、他人批判の割に自己肯定が強い傾向が感じられたのである。

信楽寮の生活を通じての彼の人格性の成長、発達はずぎのような姿を示しているといえよう。作業ぶりが承認されたことと、家庭の愛情を理解したことが彼に安定感をもたらし、これが基盤となって、作業技能の向上につれて作業に対する責任感が発生した。そして、彼の根気強さに支えられて、この責任感は彼の行動を支える支柱となり、やがて作業だけにとどまらず、寮生活の全般に対する責任感へと拡大していこうとしているのである。しかし、彼の能力に制約されて、生活空間の拡張や未来への時間展望にはやはり限界が認められる。彼の生活態度は強い緊張の連続とみられる。この点に、柔軟さを欠く堅さと脆さが感じられるのではあるが、精薄児の教育可能性を示唆する一つの典型的なケースであるといえることができる。 <安原 宏>

(2) 手紙分析による人格性発達のあとづけ 精薄児の人格性の発達を捉ええる課題の一つのアプローチとして、手紙分析を試行的に行なってみた。もちろん、精薄児のすべてについて、手紙分析を行なうことはできない。その精神機能の制限からして、手紙としての表現は限定されており、そこに人格性発達のニュアンスを把握することは不可能であるからである。幸いに前述 *Tak* と

いう寮生の手紙が、われわれの目的にかなう資料として、使用しうるであろうので、これを手ばかりとする。

この手紙は *Tak* が信楽寮へ入寮してから、4ヵ年間、家族（父、母、妹など）に書いた書簡であり、手紙75通、葉書11通（計86通）にわたっている。その内訳は表12に示した。

この手紙のなかには *Tak* の生活環境、周囲の人びと、自分自身の気持、ねがい、決意について敘述されており、その意味をわれわれは理解することができる。まず、入寮の初め頃の手紙を下に例として掲げることしよう。なお、手紙文中の括弧は、理解の助けとするため、執筆者が付したものである。

表12 *Tak*が家族へ書き送った手紙および葉書の数内訳

期 間	手紙・葉書の別	手 紙	葉 書
I 28年4月より 29年3月まで		37	8
II 29年4月より 30年3月まで		22	2
III 30年4月より 31年3月まで		5	1
IV 31年4月より 32年3月まで		11	0
計		75	11

手紙例 1（昭和28年4月10日付）

お母さん お元気ですか お母さんは僕のことどうぞ御安心下さい お願いします 私はきっと一人前の人になります お母さんの御手紙にかいている中に さぎよ（作業）のお婆さんと書いてある所はちがうので これは山田先生といって下さい この前 池田先生から風邪を引いたことを知らしていただきましたが やっと元気になってきました 僕は今 滋賀県で元気に仕事をしています 僕は滋賀県のお友達が出来て 仲よく仕事をしています これが食べたいなどいいません も(う)

青島中学校三年ですから こんどいいません ごめんなさい こんどいいませんから かんべんして下さい お願いします 久子は毎週水曜日に忘れないように 毎日え（絵）にいて 立派なえをかいて 二人でえをかいておくして下さい お願いします 滋賀県の方はとてもきれいです 山もあるし えいがあるし とてもおもしろいので 皆んなとえいがを見ました では体に気をつけて下さい

お母さんえ

Tak より

この手紙は入寮して10日目にお母さんへ書き送ったものであるが、このなかに一個の人間として環境へ適応している状態の表現が見てとられる。

（1）生活環境の敘述がある。（2）環境または仕事に対する自らの定位、または、位置が明らかにされている。（3）自己の願望があり、他人への配慮がある。（4）自分の決意というような自分の内的な世界も表明されている。

すなわち、この手紙の分析で、人格性の発達の問題として注意すべきは、次のごとく要約できるとおもふ。（1）環境、状況に対する適応せる位置の意識。（2）他我（ほかの人びと、周囲の人びとなど）に対する配慮、関心。（3）自己自身に対する統制的態度。これらの意識、態度の有無、深淺、広狭などが人格性の発達の手がかりになる。広まりの過程、深まりの過程が、発達の様相として捉らえるるのである。上述の手紙例1において、これらがすべて、ある度合において、表現されているのるみることができるのである。もちろんこのなかには、表現のぎこちなさ、稚

拙さ、繰返しもあって、表現の低弱さを感じさせる面もあるのである。

手紙例 2 (昭和28年7月4日付)

お父さん お元気ですか 僕も元気です お父さんは毎日に会社にいらってますか この間 小林先生が滋賀県にいらして 僕たちの仕事のようすを見て頂きまして ほんとうにうれしくなりました 東京からもう四ヶ月にたちました もう七月にはいました けれども 滋賀県は雨が毎日降っています もうおき夏がきて わるい病気になるから 気をつけています 僕は一生懸命仕事をしています 僕たちの仕事ぶりは 一生懸命仕事をやっている人もいし しない人も多分にあります 今日の仕事は葉の灰皿を作っています 少しだけうまく出来ていますとおもいます ………

この例は3ヵ月余経た時の手紙である。これには、自分が仕事に適應して、それへの態度の自我意識が明確となって来ているし、同時に、自己評価もまた現われはじめている。もし人格性を社会的役割とみる場合に、この手紙は、人格性の発達の一面を示しているものとして捉えらえることができる。

手紙例 3 (昭和28年7月19日付)

お母さん お元気ですか 僕も元気です お母さんが育成会があって とてもおそくなっても 少しはつらいことがあっても また淋しいことがあっても 頑張って僕のことをわすれて下さい 僕は一生懸命仕事をしています 僕の仕事は 今 角灰皿をしています 僕が角灰皿仕上をしています この成績は76個の成績です 七月十八日は祇園祭ですが 雨がふって本当に残念ですが 工場も休みですけども 明日の日曜は作業に出てはたらいて 早く一人前になって お母さんにほめられようと思います ………

この手紙には、仕事の役割意識および機能が進んでいく様子が理解される。これと同時に、母親への配慮が深まっている姿もみえるし、それが仕事意識と連なっているところに、この児の人格性発達の相様の把握がみてとられるのである。「……また淋しいことがあっても 頑張って僕のことをわすれて下さい 僕は一生懸命仕事をしています……」この一文は特記すべき言葉で、人格性発達の重要な指標とみることができる。(1) ここには他(ここでは母親)の気持の共感があり、(2) その共感の上における自己の決意があり、他への配慮がある。すなわち、両者の内面的な交渉の地平が開かれつつある様相を示すものである。

なお、この「僕のことをわすれて下さい云々」の言葉は、その後の手紙にときどき現われている。28年7月30日付、28年12月7日付、29年3月31日付に出ている。なお、つぎにかかげるに12月7日付の手紙は、さらに母親への配慮の気持を表現している。

手紙例 4 (昭和28年12月7日付)

……僕も風邪を引かないので 毎日元気で仕事をしています お母さんはこの頃僕に心配をしていますね 僕のことを忘れて下さい お母さんはだんだんよわむしになって来て 僕もお母さんのために心配

しているのです だんだん仕事もおもしろくなりました ………

ここで、「僕もお母さんのために心配しているのです」という表現は、この児の自我の成長、独立を物語っている表現とみられよう。自我の自覚性と他への配慮の積極性を示しているのである。

手紙例 5 (昭和29年3月31日)

………僕は毎日元気で一生懸命仕事をしています お母さんも安心して下さい 僕は遠い東京のお母さんやお父さんに いのっているのです そしてお母さんに感謝をしているわけです お母さんはいつも僕のことを思い出しているのでしょうか お母さんはいつも僕のことを思い出すとなくのでしょうか そして僕のことをわすれて下さい 仕事を一生懸命やっているの お母さんも僕の心配もわすれて 新しい生活をくらしいをして下さい 今までお世話をしてもらった青島中学校から出た三人は もう大人になり立派な人になっています そして学校の時代のことも しっかりおぼえています そして早く一人前になろうとしているのです そして今まで型押をしていたが 工場の先生に第二成型で仕事をしています そして僕は去年四月にはいりまして ずいぶん信楽の生活になれて本当にうれしく思います 今日で一年になりました 昨日から新しいお友達がはいりました いつも親切にしようとしています いつも仲良くなり 仕事も教えたりしようと思っています お母さん お願いがあるのです それはお菓子を送って下さい………

まる一年間の信楽寮の生活のあとで書かれたこの手紙は、人格性発達としてニュアンスに充ちた表現を含んでいる。お母さんの自分に対する配慮の理解。自分の気持をこめての母への心遣い。そして、仕事に対する自信と環境との安定感、新しい友だちへの先輩の立場よりの配慮など、時間、空間の意識の拡がり、自他の関係の深まりが、人格性発達の様相として把握できるのである。

この手紙を貰った母親は、このときの気持を次のように書いている。「私はこの手紙を繰り返して読みました。………母に心配しないようにといってくれるのでよけいふびんで、読んで涙をこぼしました」(7, 232頁)。この手紙には母親のみでなく、これを読む人をして共感を催さしめるものがある。すなわち、これがこの児に成長してきている人格性である。

いま、ここで、手紙分析の方法論的考察を簡潔に試みよう。

1. 手紙は作文、日記と同じく、精神の客観的表現として、児童心理学、青年心理学、社会心理学において研究の資料をなすものである。しかし、手紙がとくに表現としてもつ心理学的意味は、一人が他を相手として、自分の世界、自分の気持、欲求、思想などを書字をもってあらわし、伝えるということである。端的に言えば、書字を通して相互の自我の意識の前で己れを語り、伝えることであり、さらに、その効果を予期することである。この故に、手紙は人間理解の有力な手がかりとなることができると考えている。

2. しかし、手紙には、文字をもち文章を構成して表現をするが故に、この表現能力に大いに制限をう

ける。この故に、内的世界の表現が充分でなく、または、歪曲されるという事態も生じるのである。次に、手紙の表現には、儀礼的、形式的表現がある。これは内的世界の表現性にあずからない。また、表現の内容が事務的にすぎない場合もある。この故に、手紙そのものが、いつも、われわれの狙う資料的価値を有するものとは限らないことを反省しなければならない。

3. つぎに、手紙の表現性にいろいろの形態があることにも注意せねばならない。すなわち、以下の形態が見出される。

(1)心の動き、感じ、思想内容がそのまま純粹にあらわれている。(2)一部はあらわれているが、その他は暗示的に示されている。(3)ある感情、思想内容が特別に表現されている(過剰表現)。(4)儀礼的、紋切り型的に表現されている。(5)故意に抑圧し、歪めて表現されている。ここに、表現に純態と不純態があるので、手紙の資料性として、この点の吟味が留意さるべきである。

さて、精薄児の手紙の場合は、いかなる性質が予想されるか。(1)一般に精薄児においては紋切り型的表現(一種の rigidity の性格として)が多いであろう。そこに表現内容と現実の人格構造に距離やズレのあることに、注意を払う必要がある。(2)しかし、他方、精薄児の表現には、意図的歪曲や過剰表現は少ないであろうし、単純であっても、卒直な表現形態をもつ利点がある。

4. かくして、資料を吟味し、妥当な解釈をうるに、次のごとき考慮を要する。

(1)個々の文章の文脈を吟味する。(2)文章のもつ儀礼的、紋切り型的表現に注意する。(3)当該児童の人格像、行動像を他の資料より得て、手紙分析よりの結果と併せて考慮する。(4)その児童の知能、ことに表現能力、書字能力を知るようにする。(5)各手紙の表現のもつ全体印象および時間経過による変化推移に注意する。

5. 手紙分析の手つづきとして、分析ユニットを表13のごとく取り出した。これは、手紙表現をまとめ、組織づけていく便宜的枠組にすぎない。

表13 手紙分析のユニット

A 環境または状況についての敘述	B 自他の人間関係についての敘述	C 自己についての敘述
A 1 : 自分や事物について	B 1 : 他(父母、兄弟など)への配慮	C 1 : 自己の身体的状態について C 2 : 自己の仕事、役割について
A 2 : 仕事、役割について	B 2 : 自他の関係における自己の状態	C 3 : 自己の念願について C 3.1 欲求的のもの C 3.2 計画的なもの C 3.3 自己自身への願い
A 3 : 社会的関係について	B 3 : 自他の関係における自他への念願、希望	

もちろん、ニュアンスに富んだ手紙の文章を、これらのユニットにはっきりと枠づけることはできない。また、人格性発達の手がかりとしては、BとCの表現が望ましく思えるが、Aの環境についての敘述も、それが詳しく、豊かになれば、それだけ認知世界の拡大として、人格性発達の手がかりとすることができる。

しかし、理論的に、人格性発達の構造として、次の四つを考えて、それに応ずる手紙の表現を求めていくのである。

(1)認知世界の拡大。(2)感情の精細化。(3)自己受容(他我受容)の増大(温かさ, 親切さ, 愛情の進展)。(4)価値意識, 態度の形成(役割, 理想の意識)。

さて, 第2年目になる Tak の手紙には, 即物的, 客観的敘述が増してくると同時に, 自己意識や役割意識も進展している。いま, その手がかりとなるような典型的敘述をとり出して, 以下に示してみよう。

手紙例 6 (昭和29年6月14日付)

………… 貞山さんがおやめになってから 室長になって 皆んなのめんどろを見たり その部屋の人達に親切に上げています きっとよい室長になろうとしています…………

手紙例 7 (昭和29年6月31日付)

………… 僕はこの間(胃)が痛くなって寝ました しかし 僕はこんなふうに考えた 更生指導所の先生方や家のお父さんやお母さんに めいわくかけて本当にすみません 僕わるかった 保母さんにめいわくかけたりして 本当にわるかった ごめんなさい これから気をつけてわるい病気もしないで 皆と一緒に仕事をしたいと思えます…………

手紙例 8 (昭和29年6月24日付)

………… 僕は更生指導所の仕事を 一生懸命頑張って 一日も早く就職をして 大人と一緒に仕事をしたいと 思っています そして お金をもらって 家の方を喜ばしてあげようと 思っています…………

手紙例 9 (昭和29年9月1日付)

………… 僕は貞山先生に負けないで 一生懸命仕事をします そして 肥汲もこの頃やっています はじめは しなかった だんだん 肥汲をすることになったことは 大変うれしい…………

手紙例 10 (昭和29年9月13日付)

…… 僕は大槻君のことを 心配しています …… 僕は毎日心配しています そして 夜になると 僕は寝なかった 大槻君は 僕にこんなふうに話をした いつも親切に教えた仲野君のことを わすれない いつも教えるたびに こんなふうにしてもらって 本当にすみませんといってくれた …… 大へんやさしい大槻君にも お別れするのは 本当に残念と思った 僕は, いつも親切に お菓子をあげたりしていた 僕は こんなふうにして 人に教えるのは 一番すきですから いつも親切に上げています だんだん 部屋長らしくなりました…………

以上は手紙のなかの僅かな部分であるが, 手紙全体の印象よりしても, 大体つぎのことが分る。(1)環境や状況に対する認識が客観的になる。(2)それにおける自己の位置づけが, 適応性を増している。(3)自己の内面的世界への堀り下げが, 深くなっている。

第3年目になると、この傾向は強化されている。手紙として、しっかりした表現形態を担っている。第3年目(30年4月から31年3月まで)は手紙の数が5通、葉書1枚で、極めて少ない。これは彼が自分自身の問題にとりくみ、家庭よりの独立の道のあるく過程として見るという、一つの解釈を試みに提示しておこう。つぎの4年目のはじめの手紙例は、このことを暗示すると思われる。

手紙例 11 (昭和31年4月8日付)

……僕も元気で 仕事に頑張って居ります いつもいつも お便りしてあげなくてはなどと 心に懸けながら 私自身は病氣もしなかったり いちども休みもしないでいたのに 今までお便りも出来ず 本当にごめんなさい これから お便りをするようにしたいと思って居ります この度 お兄さんが石川県にいらしたかったので 家も大へん淋しくなりましたので お兄さんのかわりに 僕がお便りしてあげます…… 赤尾君や山本君や雨宮君など 就職して一生懸命仕事に頑張って居ります 僕達はまだ三年になりもう東京の事も忘れて 信楽の子になりました……

以上、一人の精薄児の手紙を資料として、精薄児の人格性の発達を追求し把握するアプローチを、試図的に提示したのである。

§ 4 さて、以上において、寮生 *Tak* の人格像およびその発達を、いろいろの手にしうる資料から捉えてきた。*Tak* との面接、行動観察、指導員や保母による観察資料による総括、手紙分析による理解には、若干のくいちがいがあるが、当初の場面に適応する時間空間的拡がりのある行動像へと発達する過程が見出される。前述のなかにあるように、“生活場面での *Tak* の言動が今までのように目障りにならなくなってきた”(本文34頁参照)という観察は、極めて、この変化の意味深い捉え方であろう。そして、前述の手紙分析の方法論的考察において提示した人格性の発達、すなわち、四つの典型的過程をあとづけることができる。ことに、人格性の発達として特記すべきは、自他の関係意識が深化、発展してきている姿である。ここから、自己の価値意識、責任の意識が発展してきていることである。すなわち、父親の精薄教育への尽力を自負して、みずから幸せと感ずるようになること、手紙分析において示されたように、近親者に対する深い配慮が出てきたこと、寮生の一人として全体へ適応する態度があらわれてきたこと、作業への責任感、意志力が発動してきたことなどに見てとることができる。

では、この人格性の発達を促した原因、または、契機というものはどんなものか。この間には、この研究の出発点における問いであり、また、本質な問いでもある。これに対して、仮説的ではあるが、第一に、この信楽寮の教育状況をあげることができる。なにかんずく重要なのは、どんな児でも見捨てず、いつも受容していく指導者の態度、および、寮の雰囲気にあると思われる。第二に考えられることは、家族(とくに父と母)よりの全面的な受容である。父君の手記によれば、*Tak* に対する態度には若干の段階がある。はじめは、このような精薄の児をもったことの

不幸のなげきのなかから、青島中学入学を転機として希望、精薄児教育への新しい教育的展望を得、さらに、このような子供をもつ卑屈、恥らいの感じを克服して、積極的にこの子の教育に精進し、信楽における成長に、ますますこの子の教育に喜びと誇りを感じ、遂には、次のごとき言葉さえ述べてくるのである。「私共は *Tak* がわが家に生れなかったなら、今日の人間にはなれなかったろうと、深く神に感謝を捧げるように心境が変化しました」(5, 213頁)。家庭におけるこのような態度の進展が、信楽寮の教育状況に相応じて、*Tak* の人格性の発達に中心的に寄与していると思われるのである*。 <正 木 正>

6. 総 括 と 検 討

§ 1 以上において、われわれは、信楽寮における精薄児の生活構造と人格性発達の過程、様相について、その基本的骨格をあきらかにしてきた。しかし、ここで改めて述べておきたいことは、この研究は課題の究明であって、単なる心理学的実態調査ではないということである**。序論においてもふれたように、“機械ロクロの前に立って作業をしている彼らの姿は、もはや精薄児とは思われない”という印象像をわれわれに与えるように、彼らをみちびいた信楽寮の職業教育、生活指導は、彼らの人格構造の変化、自我の成長、人格性の発達に対して、いかなる意味連関性をもっているかが、われわれの場合には、まず問われてくるのである。従って、ここでは、“精薄児”という抽象的な断面において処理される心的機制が問われるのではなくして、彼らの成長にかかわるところの世界内存在のあり方、精神の構造が問われなければならない。その問い方として、われわれは、“心理学”とか“心理学的”という用語法を用いて、それに理論を還元しようとはしなかった。従来のいわゆる厳密科学としての心理学は、一定の抽象的レベルにおける心的事実の機能的相関は把握しえても、存在のもつ意味構造は問わないし、また、それ自身、方法的にも問うことのできない課題性格を担っているからである。しかし、この意味構造こそわれわれの研究においては問われなければならないのである。なぜならば、教育という現実、そのものとしてすでにそれが問われなければならない在り方をもっているからである。われわれは、信楽寮という現実構造の開明に最もよく適した、また、問いの性格によって限定された新しい方法論的考察に迫られている。この点、現象学的考察はわれわれの方法論の中核となつて、方法内容を豊かにしてくれると考えている。すでに、「人格行為の意図性は、単に心的世界においてのみ問われるものでなく、また、客観的社会の世界においてのみ問われうるものでもない。人格、社会、文化の出会いの世界においてはじめて可能であり、しかも、その出会いのあり方それ

* 父兄の人間の成長の様相を把握することは、われわれの課題追究において、極めて重要な位置と意味をもつものであるが、ここでは、紙幅の都合上、詳述は割愛せざるをえない。別の機会に発表する予定である。

** 課題究明においては、問いと答えとの関係性が自覚的に問われなければならない。いいかえると、いかなる問題性を担った問いと答えの関係が問われるかという方法的自覚が要請される。それに対して、実態調査は問い以前の問いであり、問題性は無性格であり、問題意識は稀薄であると私は考えている。

自身、すでに歴史的意味を担っている。われわれの現象学的開明は、この歴史性を担ったかの出合いの世界そのものに焦点づけられなければならない」(本文 8 頁)とわれわれは言った。このことから明らかなように、もし、私個人の用語を用いるならば、かかる方法こそ社会心理学的方法であると言いたいのである。しかし、それは、単なる現実認識にとどまるものではなく、たえず教育実践的力動性を包んでいる意味的現実の開明である*。ここに、われわれの課題の特殊性があるのである。

§ 2 常識的にいって、信楽寮の精薄児教育は成功しているということができよう。ある人は、それを、地の利を占めているからであると言うかもしれない。また、ある人は、粘土細工は精薄児の手の動作機能によく適合し、そこに使い易さ (Gefügigkeit) が成立するからであると言うかもしれない。あるいは、職員の能力に帰するかもしれない。しかし、ここの教育の効果性は、直ちにそのいずれにも還元しうるものではない。精薄児のもつ心理-生理的条件、信楽寮およびこの地域社会のもつ社会的条件、文化的条件、歴史的條件が、いかにして彼らの人格体系のなかに統合され、それが、彼らの人格性の発達といかなる構造連関をなしているかを明らかにすることによって、はじめて効果性の源を究めることができるのである。それ故にこそ、われわれは、信楽寮の教育状況、人間関係の構造とその働き、また、彼らの内的世界の構造を問うてきたのである。しかし、それらを一貫している教育的脊骨は、陶器生産という活動性 (Aktualität) にあると考えたい。ここでいう活動性とは、手足を使用しての作業を直ちには意味しない。それは自己実現のあり方にかかわる。彼らのエゴ・オリエンテーションがかかわる四つの時期的推移過程については、すでに説明してきたが (本文 26 頁~28 頁)、信楽寮における教育的状況が客観的に展開している作業を中心とする行為の秩序と、寮生ひとりびとりが各時期において逢遭する主体的世界との統一のあり方そのものが、活動性を形成しているといえる。言いかえると、客観世界と主体世界との統一世界 (あるひとは、これを自己了解と名づけるかもしれない) を形成する契機が、信楽寮では陶器生産作業という活動性、すなわち自己実現のあり方にほかならないということができる。そして、この活動性が就職という文化価値への志向性をもっており、それによって、より広範にしてより深い文化価値との出合いが予想され、あるいは現実化されているところに、信楽寮の特殊性があり、そこに人格性の統一、発達があり、教育の効果性があると考えたい。従って、ひとしく作業という言葉を用いるにしても、養護施設、特殊学校 (級) にみられる作業とは、おのずからその意味と機能を異にしており、また、同じく職業教育、生活指導という形態をとりながらも、その意味内容は異っているのである。

この世界統一の過程は、前記の Tak の手紙分析が明瞭な姿をもって表示してくれるのである

* この点、相馬の実践的教育研究法は、われわれの方法論的考察に深い示唆を与えてくれる。これに関して、正木は「教育の現実に迫る研究法は、教師の実践の流れを方法論的意識において条件発生的関係として把握してゆくことにあるのではないだろうか」と解説している (10, 384 頁~385 頁)。

が、しかし、それは、同時に時熟的（10、402頁～404頁；本文14頁）であることを意味している。

「普通学級や特殊学級(校)における精薄児にくらべて、この児の文字の覚え方は非常に速い」ということを職員から耳にする。教科学習についてはすでに述べたところであるが（本文14頁）このこと自体、すでに、人格性の発達が変わる教育的時熟性を物語っているものといえよう。もちろん、そこには、池田氏はじめ職員たちの教育的なかわりあいがあることは言うまでもない。われわれは、こうした活動性、世界統一性、時熟性のなかに、信楽寮のもつ全体的教育構造と、寮生の展開する人格構造の基本的な骨組みを見出すことができると考えている。

§ 3 この研究の究極的目標は、すでに述べたように、彼らの人格性発達の様相を、信楽寮（さらに、これは信楽町の全体的社会構造のなかに位置づけられなければならない）のもつ教育的状況性との連関において把握し、さらにそれを通して、教育構造一般の認識を深めんとするところにある（本文8頁）。かかる展望にもとづくとき、この研究は僅かその第一歩を踏み出したにしかすぎない。しかし、それは事実集積という意味の第一歩ではなくして、問題性の輪廓、その基本的骨組み、方法的展望、言いかえると序論において提出した三つの問い（本文2頁）に対する答えの準拠結構の提示という意味の第一歩である。従って、この報告は序論的意味を担い、総論的性格をもっているといえる。われわれの歩むべき道程は、あまりにも遠い気がする。時には指南針の調整を必要になってくるであろう。そこで、近い展望のもとにおいて、今後なさなければならぬ残された問題をあげることによって、第二歩への課題をなげかけるとともに、これをもって、今回の第一報告の筆を擱こうと思う次第である。

(1) 現段階においては、主として彼らの人格像の粗描にとどまっていた、人格の内面的位層における了解には、いまだ程遠い。了解への道そのものが歴史的でなければならない。従って、ここに、一人ひとりの主体の追跡的把握が行われなければならない。

(2) 目下手がけている対象寮生は、すでにあげた15名でしかない（表10および表11参照）。この点、対象範囲は全寮生にまで拡大されなければならない。

(3) われわれが今日までフィールドに入った時間量は決して多くはない。従って、職員や寮生との接触の量と深さ、また、観察内容には、おのずから限定を受けざるをえなかった。そこで、これまでは、主として指導員、保母による観察、体験、意見が中核的資料となり、われわれ自身による観察的把握や寮生との面接資料は、むしろ補助的役割を演じた結果となった。この点、(1)と連関して、なんらかの方法を用いることにより、研究員を常時フィールドに配置し、彼自身が教育的状況の現実的な担い手であるとともに、研究的状況の主要な要因であるべくせしめることが要請される。そして、このことは、われわれの方法論的展開において、本質的役割をもつと考えなければならない。

(4) すでに述べたように、この施設は公共社会に直結している。従って、この研究対象は信楽寮にのみ限定され、閉ざされるべきではなく、信楽町という地域社会全体の構造と機能の同時的

開明がなされなければならない。

(5) 職員たちの教育的人間としての成長の様相，多くの父兄の親としての人間的成長の姿，これを彼らの内面的世界において捉らえるとともに，それが子供たちの主体的世界の展開に対して，いかなる関わりあいをもっているかが，さらに深く追求されなければならない。

(6) 信楽寮のもつ教育構造の特殊性の理解は，その他の各種の精薄児施設のもつ特殊性の開明，また，施設外の精薄児の生活現実の究明の上に立って，はじめて正しい位置づけが可能であり，また，それによってはじめて精薄児教育に関する教育理念，教育価値目標，教育技術の確立が可能であるとする。従ってこの精薄児の人格性発達に関する研究は，他の施設，あるいは家庭にまで，その対象が展開的に求められていかなければならない。

(7) これを要するに，この研究それ自身すでに歴史性を担うものであって，歴史性の排除は，とりもなおさず研究の抽象性と凋落性を意味するものである。〈高瀬常男〉

参 考 文 献

- 1 安倍淳吉・高橋和年： 矯正場面における価値の調整に関する社会心理学的研究 第1報 第2報
高瀬常男・その他 東北矯正科学研究所紀要 I 1955年 1頁～122頁
- 2 池田太郎： 二年の回顧 信楽寮年報 第2号 1953年 31頁～42頁
- 3 池田太郎： 信楽寮 近江学園年報 第5号 1953年 245頁～254頁
- 4 池田太郎： 信楽寮における職業補導と社会生活の実際 精薄児とお母さん 主婦の友社
1957年 112頁～156頁
- 5 仲野好雄： 特殊教育に奇蹟出現を 青鳥十年 東京都立青鳥養護学校 1957年 209頁～213頁
- 6 仲野好雄： 父親の反省 精薄児とお母さん 主婦の友社 1957年 240頁～244頁
- 7 仲野美保子： この子の杖に 精薄児とお母さん 主婦の友社 1957年 186頁～240頁
- 8 正木 正： 感化的教育心理学的構造 教育の人間関係の論究 京都大学教育学部紀要
第2号 1956年 130頁～161頁
- 9 正木 正： 道德教育の方法論(1) 児童心理 第139号 1958年 102頁～118頁
- 10 正木正・相馬勇： 教育的真実の探究 へき地に生きる教師の記録 黎明書房 1958年
- 11 正木正・黒丸正四郎： 精神薄弱児の人格形成に関する研究 信楽寮を中心にして 第1報 日本心理
高瀬常男・田中昌人 学会第21回大会発表論文抄録 九州大学 1957年 217頁～220頁
安原宏・西岡忠義 鍾幹八郎
- 12 Rogers, C. R. : The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change.
Journal of Counseling Psychology, Vol. 2, 1957, Pp. 95～103

〔付 記〕 最後ではあるが，この機会をお借りして，寮長池田太郎氏御夫妻はじめ職員の皆様，また，仲野好雄氏御夫妻および父兄の方々の深い御理解と温かい御援助に対し，私ども一同，心からお礼を申しあげる次第です。池田氏の情誼はいつも私どもの仕事の励ましになり，忘れ得ないものであります。